# 古代アメリカ学会主催第3回公開シンポジウム講演録2

まなぶ、たのしむ 南北アメリカの古代文明 一研究成果から学びの場へ一











目 次

1.	ワリとイ	ンカ:	ア	ンデス	におけ	る帝国	をめ	ぐる
	新たな発	見						

松本 雄一(山形大学准教授) ……3

- 2. 科学で探るアンデス文明 瀧上 舞 (国立科学博物館研究員/山形大学学術研究員) ………8
- 3. 門外漢による気楽なマンガ的世界 芝崎みゆき (画文業) ...... 14

4.	アンデスにおける「遺跡博物館」の成果と課題
	~ペルー・アンコンでの活動経験を中心にして
	市木 尚利(立命館大学環太平洋文明研究
	センター・プロジェクト研究員 20

- 5. ペルーの台所:食文化からみる多様性と変化 佐々木直美(法政大学教授) ...... 24
- 6. 質問・ディスカッション …… 30
- 7. 質問と回答 …… 36

司会進行 伊藤伸幸 (名古屋大学)・渡部森哉 (南山大学)

2021 年 12 月 26 日シンポジウム開催(オンライン開催) 2022 年 3 月 31 日講演録発行

\*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます

# まなぶ、たのしむ 第1回: 12月19日(日) 14:00-17:00 第2回: 12月26日(日) 14:00-17:00

2021年オンライン開催

# 南北アメリカの古代文

研究成果から学びの場へ

南北アメリカ大陸には、実にユニークな古代文明の展開がありました。

未知や謎という言葉で語られることの多かったこの文明は、研究者による発掘調査とさまざま な分析によって日々新しい成果が生まれ、その実像が明らかになりつつあります。

このシンポジウムでは、一線で活躍する研究者が最新の成果をわかりやすくご紹介すると同時 に、食、マンガ、博物館など身近なテーマとの関連もとりあげながら、中学や高校での歴史教育 への活用可能性を探ります。





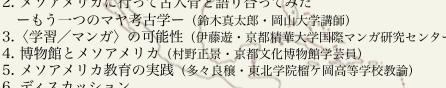
アステカ太陽の石 © 伊藤伸幸

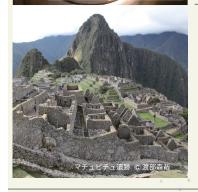


■第1回参加登録 12月19日(日) https://forms.gle/2CdJ4DzexQZYecs86

- 1. メソアメリカの古代文化 (井関陸美・明治大学教授)
- 2. メソアメリカに行って古人骨と語り合ってみた ーもう一つのマヤ考古学ー(鈴木真太郎・岡山大学講師)
- 3.〈学習/マンガ〉の可能性(伊藤遊・京都精華大学国際マンガ研究センター特任准教授)

- 6. ディスカッション





# ■第2回参加登録 12月26日(日) https://forms.gle/XXGgq838iNFahQXHA

- 1.ワリとインカ:アンデスにおける帝国をめぐる新たな発見 (松本雄一・山形大学准教授)
- 2. 科学で探るアンデス文明 (瀧上舞・山形大学学術研究員)
- 3. アンデス文化の敷居を低く一門外漢による気楽なマンガ的世界(芝崎みゆき・画文業)
- 4. アンデスにおける「遺跡博物館」の成果と課題 ~ペルー・アンコンでの活動経験を中心にして (市木尚利・立命館大学環太平洋文明研究センター・プロジェクト研究員)
- 5. ペルーの台所:食文化からみるペルーの多様性と変化(佐々木直美・法政大学教授)
- 6. ディスカッション

# 古代アメリカ学会

https://americaantigua.org/

## 古代アメリカ学会主催 第3回公開シンポジウム 講演録

# まなぶ、たのしむ 南北アメリカの古代文明 一研究成果から学びの場へ一

古代アメリカ学会主催の第3回公開シンポジウム・「まなぶ、たのしむ、南北アメリカの古代文明一古代文明研究成果から学びの場へ一」を始めたいと思います。私は今日のシンポジウムの司会をします、伊藤と申します。まず、当学会の会長であります、井口の方からご挨拶をいただきます。よろしくお願いします。

#### 会長挨拶

伊藤さんありがとうございます。皆さんこんに ちは。本日は古代アメリカ学会が主催するシンポ ジウム「学ぶ、楽しむ、南北アメリカの古代文明 | にご参加いただきまして誠にありがとうございま す。古代アメリカ学会会長の井口と申します。当 学会は南北アメリカの古代文明を研究する考古 学・人類学・歴史学などの研究者やそれから研究 者以外にも関心を持つ様々な方が所属する学会で す。学会ではお互いに切磋琢磨しながら研究を深 めることは勿論、その研究成果を広く社会に発信 していくことを現在の大きな課題としています。 特に高校や中学の歴史教育・社会科教育の教材授 業に私どもの研究の成果をどう活用していけるの かということを重要な課題として位置付けて活動 しております。今年はその一環として科学研究費 補助金からの助成を頂き、このオンラインの公開

シンポジウムが実現致しました。今日のシンポジウムでは南米のアンデス文明を取り上げ、第一線で活躍している学会のメンバーからは松本雄一さん、瀧上舞さん、市木尚利さん、佐々木直美さんに登壇いただきましてそれぞれの研究成果から分かりやすくお話をして頂きます。それから学会メンバー以外からは楽しいイラストと漫画・文章による古代文明の解説や紀行文のご著書をたくさんお持ちの芝崎みゆきさんをお迎えしています。日曜日の午後、どうぞリラックスしてお聞きいただければというふうに思います。そして質問の方もお気軽に・積極的にお寄せいただければ嬉しく思います。どうぞよろしくお願いいたします。それでは伊藤さんの方にお返しします。ありがとうございました。よろしくお願いします。

- 伊藤)ありがとうございました。それでは、このシンポジウムの趣旨について当学会の渡部の方から説明をしたいと思います。ではお願いします。
- 渡 部) このシンポジウムは前回・1 週間前の 12 月 19 日に行って今日は 2 回目なんです が、今日初めて参加する方もいらっしゃ ると思うので趣旨説明をさせていただき ます。古代アメリカ学会は今から 25 年

前に設立された学会であります。そして 普段は研究者同士で最新の研究成果について時間を共有するような活動を行って おりますが、会員以外に対しても古代アメリカに関する知識を社会に還元して興 味を喚起するような試みを行っておりま す。本シンポジウムはその一環として企 画されました。これまで、2009年に高 校の歴史の教科書・世界史の教科書を検 討して研究成果と照らし合わせてできる

だけ正しい情報に書き換えて行こうとい うことを行っています。2015年度には 中学校の教科書の改訂・チェックもいた しました。そして高校の方で来年度から 歴史総合が始まりますので、それに合わ せた教材作成などをできないかというこ とを現在考えております。その一環とし て今回のシンポジウムを企画いたしまし た。高校の歴史の教科書の検討の際に、 1つの例として取り上げたのは世界の四 大文明です。これは英語圏やスペイン語 圏では言わない言い方でして、日本や中 国の一部で使われた用語ですけれども、 こういったものはどうなんだという問題 提起をしたところ、世界史の教科書から 四大文明という用語がなくなるという結 果がもたらされました。そのいわゆる四 大文明に入らない2つの文明・メソアメ リカ文明とアンデス文明を今回取り上げ ております。

こういった一般向けの公開シンポジウ ムは今回で3回目です。2009年に1回 目、2010年に2回目を行いまして、そ れから11年経ちまして、今回3回目を 行うわけです。これまでのシンポジウム ではできるだけ正しい研究成果を伝える ということに重きを置いていましたが、 今回は知識を扱う職業の人々にターゲッ トを当てた構成となっております。例え ば、学校の教員とか料理研究家とか漫画 家とかテレビ制作をしている方々、そう した人々に知識を持ってもらうことで古 代アメリカの知識がさらに多くの人に広 まることを期待しております。前回・1 週間前のシンポジウムでは「これまで研 究成果を正しく伝えることに重きを置い ていたけれども、むしろ興味を持っても らうためには学説と一般の人たちが持っ ているイメージの間にズレがあってもい いじゃないか、むしろそういったことを 利用して興味を持ってもらうことの方が 重要ではないか」という意見が出されま した。今回はそういうことを踏まえて、 正しいことを伝えることよりも、むしろ どういったことをやったら関心を呼び起 こすことができるかということを最後の ディスカッションで議論したいと思いま す。本日の大まかな時間配分ですけども あくまで目安ですので、時間は前後する かと思います。そして本日伊藤さんと私・ 渡部が司会を行います。ここに注意事項 が書いてありますけれども、録音・スク リーンショットは全て禁止いたします。 質問はチャットではなくて Q & A に書 き込んでください。できるだけ質問にお 答えするようにしますけれども、答えら れない質問に関しましてはシンポジウム 終了後に講演録を作成いたしますのでそ こに回答を載せたいと思います。そして 講演録の作成のためにレコーディングを 致しますのでご了承ください。以上です。

伊藤)ありがとうございました。今日のプログ ラムについてちょっと説明をいたします と、一番最初はアンデス文明について全 体的なお話をしていただきます。山形 大学の松本雄一さんです。「ワリとイン カ:アンデスにおける帝国をめぐる新た な発見」ということで話していただきま す。次は最前線の研究成果をわかりやす く話していただくということで国立科学 博物館研究員 / 山形大学学術研究員であ る瀧上舞さんに「科学で探るアンデス文 明」ということでお話しいただきます。 それから漫画という視点からお話いただ くのは画文業の芝崎みゆきさん。「アン デス文化の敷居を低く―門外漢による気 楽なマンガ的世界―」ということでお話 しいただきます。それから次は立命館大 学環太平洋文明研究センタープロジェク ト研究員の市木さんに『アンデスにおけ る「遺跡博物館」の成果と課題~ペルー・ アンコンでの活動経験を中心にして』と

いうことでお話いただきます。そして最後の講演としては法政大学の佐々木さんに「ペルーの台所:食文化から見るペルーの多様性と変化」ということでお話しいただきます。以上が講演なのですけれども、先ほど渡部の方からお話ししましたように、講演の最中でも結構ですので Q & A の方から質問等がありました

ら書いて出していただきたいと思います。それを講演の都度1人ぐらいは取り上げることはできるかと思います。それ以外については講演の後にします。ディスカッションの方で取り上げて話をしていきたいと思います。ディスカッションについて、司会は渡部の方に移ります。どうぞよろしくお願いいたします。

## 1. ワリとインカ:アンデスにおける帝国をめぐる新たな発見

松本 雄一(山形大学准教授)

では発表を始めさせていただきます。今回、 「ワリとインカ:アンデスにおける帝国をめぐる 新たな発見」ということで、アンデス文明におい て帝国と呼ばれる社会に焦点を当てようと思いま す。そしてこのお話では、考古学の面白さってい うのは果たしてどういうものなんだろうっていう ことを1つの裏テーマとしてお話しさせていただ きたいと思います。まず、アンデスにおける近年 の発見って言うのを思いつく限りちょっと並べて みると、新大陸最古のアドベ(日干しレンガ)の 建築、新大陸最古のモニュメント、新大陸最古の 都市、完全な状態でのミイラ、などが挙げられま す。このように考古学がニュースサイトなどで扱 われる際にはどうしても最古、あるいは珍しいも のの発見に限定される傾向があるんじゃないかと 思います。ただ、ここで一度立ち止まって考古 学における発見というのはなぜ重要か考えると、 やっぱりそれまでの見方だとか定説っていうもの に修正を迫る、あるいは覆すというところにその 面白さがあると思うんですね。でも「最古の~ | や「~の発見」が学問的な脈絡を離れてメディア を通じて現れた時に、それ自体が「なんとなくす ごい」で終わりがちなんじゃないかと思います。 でも実際には、一般向けの情報としてなかなか取 り上げられない、地道で長期的な調査から定説を 覆すというような魅力も考古学には存在している んじゃないかと思います。それまで知られていな

かった新しいもの、これまで見つかったこともないほど古いもの、そういった発見がそれまでの定説をガラッと変えるおもしろさがある。その一方で地道な証拠の積み重ねから実証的に定説に迫るおもしろさもあるわけです。どちらもそれまでの当たり前が覆されるという点で同じくらいエキサイティングで、考古学という学問の重要な一面だと思うんですね。今、アンデスの考古学でこの2つの要素を非常によく表してるのが帝国をめぐる考古学研究だと私は思います。

そこでまず本題に入る前にちょっと帝国、特に古代帝国っていうものに関して確認したいんですけれども、まずは研究者間の一応基本的な共通認識として、「多様な民族や文化から構成される巨大な国」という大まかな定義はできるんじゃないかと思います。つまり帝国と言うとやっぱり単なる国では駄目だということになります。では国家と帝国って具体的にどう違うのか。色々議論はあるんですけど、帝国は征服あるいは力による強制や威圧によって生まれたということが1つ重要な基準となります。例えば強力な国家が力の弱い国家や地域を取り込む形、ローマ帝国、モンゴル帝国の拡大とか色々事例はありますよね。アンデスにおいて帝国に対応するのはワリ帝国とインカ帝国であるとされています。

本題に入る前に、今回の話の舞台になるアンデスに関してみておきましょう。アンデスという地

域は南北を走るアンデス山脈によって高低差が激 しいのですが、それゆえに異なる環境が近い距離 に存在しています。大きく異なる環境が隣接して いるんですね。多様な環境に多様な文化が栄え たっていうのはアンデス文明の展開における重要 な特徴だと思います。そういったアンデスにおい て広い範囲を支配する帝国の場合、当然異なる多 様な環境に生きる人々をその支配下に置いたこと になるわけです。

ワリ帝国が中央アンデスの非常に広範囲に影響 を及ぼしたのが紀元後600年からだいたい1000 年ぐらいとされています。これに対してインカ帝 国は 1400 年代半ばに帝国となり 1532 年にスペイ ンに征服されたことになります。やはりワリとイ ンカの影響が及んだ範囲は他の地域文化、例えば ナスカ文化・モチェ文化に比べて格段に大きいと いうのは分かると思います(図1-1)。まず時代 が新しいインカ帝国から見ていこうと思います。 やはり一般的なインカ帝国のイメージと言うと、 石造建築なんじゃないかと思うんですね。ここに あげられているのは、サクサイワマンの砦の巨大 な石組(図1-2)、クスコ市の太陽の神殿の精緻 な石組、そしてクスコの市街地に残る石組ですね。 ナイフの刃1枚通らないと言われていると思いま す。こういった巨大かつ精緻な石造建築、それが 広い地域を支配した強大な帝国というイメージと 結びついているんじゃないかと思います。

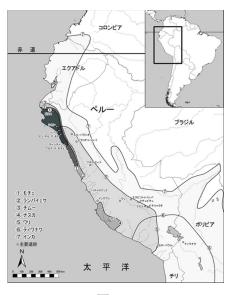


図 1-1

ここで実際のインカ帝国の研究っていうのはど うなっているのか見てみましょう。実はインカ帝 国研究に関しては長い間考古学が盛んではなかっ たんですね。クロニカと呼ばれる文書資料を中心 とした歴史学的研究が主体だったんです。ちょっ とややこしいんですがこれからの話でずっと出て くるので説明しますと、クロニカっていうのはス ペイン人によるインカ帝国征服のあと、兵士や僧 侶を始めとする様々な人々が残した記録文書で す。だから考古学から得られない詳細な情報があ るわけですね。ですので、インカ帝国に関しては 文字を持たなかったアンデス文明の展開の中で例 外的に文字資料があることになります。したがっ て、この文書資料を用いた歴史学的研究の果たす 役割がインカ帝国の研究では非常に大きく、考古 学による調査は立ち遅れていると言って差し支え ない状況です。最近ようやくそういった考古学的 なデータを歴史学的研究と組み合わせることの重 要性がわかってきたということになります。考古 学には考古学の役割があるという認識が広がった んですね。これはなぜかと言うとクロニカに問題 点があるからです。スペイン人が書いた資料なの で、征服者の偉業を称えるための脚色やヨーロッ パ人の価値観によるバイアスといったものが含ま れている。だから批判的に検討しなきゃいけない わけです。インカ帝国の人々が自分たちについて 語った情報をスペイン人が自分たちの考えに合わ せて理解して、それをさらに文字に起こすとなっ た場合、歴史的事実はどこにあるんだろうかって



図 1-2

ことになるわけですね。ここで重要な役割を果た すのが考古学です。

この問題点を示すお話をちょっと今から紹介し ようと思います。クロニカによればインカ帝国に は13人の王が存在するとされてます。ただ初代 から8代までは実在が疑われる、神話上の存在で はないかと言われている。そして、第9代のパ チャクティ帝からは実在するだろうと言われてい る。この第9代パチャクティ帝は、まさにインカ を単なる国ではなくて帝国にまで押し上げた創設 者で、その功績の中で特に重要なこととして、イ ンカと対立する勇猛なチャンカ族を征服・支配し て地方支配を本格化したこと、そしてそれと同時 に敵対関係にあったクスコや周辺の集団を軍事的 に統合していったことが挙げられます。最終的に クスコ周辺を含む広い範囲を配下に治めたのかパ チャクティ帝であるとされます。パチャクティ帝 がどういった姿をしていたのかに関しては、後の 時代に描かれたものが残っています。そしてそれ と現在のパチャクティ帝の表象を比較すると非常 に興味深いことが分かります。これはまさにイン カとチャンカ族の戦争が起こったビルカスワマン という場所に2010年頃建てられたパチャクティ 帝の像なんですけども(図1-3)、非常に英雄的 な形で復元・表象されていると言えると思いま す。ただ、近年このパチャクティ帝の功績につい てある種の疑義が呈されていたんですね。現在語 られているような形ではなかったんじゃないかと いう疑義です。それはまさに考古学から提示され



図 1-3

た疑義でした。アメリカ合衆国の考古学者ブライ アン・バウアーが非常に長期にわたってクスコ周 辺で1つ1つ遺跡を登録し、土器を検討すると いった地道な調査を行いました。その結果、クス コの周辺に戦争の痕跡がなかったんですね。砦な どの戦の痕跡もなければ、考古遺物、例えば土器 などに劇的な変化もみられない。支配した側が支 配された側に自分たちのやり方を押し付けたよう な形跡がないんですね。だから実は、少しずつ平 和的に周辺社会は統合されたんじゃないかという のが考古学のデータから明らかになっている。つ まりパチャクティ帝による急激な統合はなかった んじゃないかという説が提示されました。ここで 重要なのはインカ・チャンカ戦争の描かれ方です。 インカ・チャンカ戦争はパチャクティ帝の功績の 最も大きなものの1つとして挙げられています。 「創造神ビラコチャの加護を得たパチャクティ帝 が強力で好戦的なチャンカ人に勝利を収め、積極 的に征服事業に乗り出して、帝国としてのインカ の基礎を築きあげた」というのがそのストーリー です。つまりただ1人の英雄による、ただ1つの 勝利が全てを変えたという物語です。その背景に は、チャンカ族が強力な国家であるという暗黙の 前提があったんですね。そこで先ほどのバウアー はここにもメスを入れていくわけです。チャンカ 族の本拠地とされるアンダワイラス地方で徹底的 な調査を行ったんですね。チャンカ族の遺跡は標 高の高い部分、3000mを超える場所に集中的に 分布していて、山の上に分布しているという状況 です。つまり訪れるのが非常に大変なんです。山 の上の非常に防御に適した地形に、丸い家屋建築 が集中しています。そして多くの場合防御壁で守 られているんです。下から攻めてくる敵から防御 しやすい上に、さらに塀で囲まれている。つまり それぞれの山の上に非常に分裂した状態で小さな 集団が分布していたんです。少なくとも強力な統 一国家ってイメージではないんですね。そういっ た実態が明らかになってきた。私の調査地の近く にも遺跡があるんですけど標高 3900 m の尾根の 上に位置しています。アクセスが困難な場所に集 落、あるいは城壁・防御壁がある。土器の質を見

てもインカ帝国に見られるような品物と比べるべ くもないですね。インカを帝国の地位にまで押し 上げたとされる祖のパチャクティ帝、その躍進の きっかけとなるのは強力なライバルであるチャン カ族の征服であると言われてきたわけですけれど も、これに対して考古学のデータから明確な疑義 が呈された、違うんじゃないかという視点が提示 されたことになります。つまりチャンカ族は強大 な単一政体ではなく、小集団が独立して併存して いる。そして比較的簡素な集落が分裂していて王 様のような人もいなかった。だからパチャクティ 帝の勝利を意味づけるために強大なライバルとし て、インカによってチャンカ族は語られることに なったのではないか。いわば強力なライバルに仕 立て上げられたのではないか。10年以上にわた る地道な遺跡分布の調査と遺物の分析によってイ ンカ帝国の確立と征服過程をめぐる定説は今大き な変更を迫られているという状況です。

では次にワリ帝国について見ていきたいと思います。ペルー中央高地南部アヤクチョ地方に首都と目されるワリ遺跡が位置しています。巨大な壁で仕切られた空間の中に非常に多くの建築が分布しており、だいたい紀元後600年頃に大規模化したと言われています。標高約2600mのところに位置していて、その中核部の広さは約300ヘクタール。周囲の住居を含めると約1500ヘクタールという規模でペルー最大の遺跡の1つであるということがいわれています。高い壁に加えて仕切りの多い建築、そしてD字型とされる特徴的な建築があります(図1-4)。円形ではなく真ん中

が平らになっていて、そこに出入口があるような ものが D字型の建築と言われているもので、広 範囲に分布しています。巨大な壁の内部は仕切り 壁で区画されていて部屋や通路が築かれているこ となどから、明らかに都市に対応する遺跡だった と言われていますね。その中でも特徴的な建築と して、D 字型の建築・仕切りの多い建築・支配者 の埋葬施設が挙げられてきました。埋葬施設は完 全に盗掘されてしまって何もないものしか知られ ていないんですが、石材加工のレベルの高さでど れだけの労力が注ぎ込まれたかが分かります。D 字型建築は儀礼のための施設つまりは宗教的な儀 礼を行った施設であると想定されていて、その場 で饗宴つまり宴会をやったり宗教的な儀礼をやっ たりした、あるいは捧げものをした痕跡が確認さ れています。もう1つ特徴的なのが仕切り壁の多 い建築です(図1-5)。入ることができる人、つ まりはアクセスが限定されている、おそらくは政 治的に使われた空間であるというふうに考えられ るわけです。まとめると、仕切りの多い建築は政 治的な機能を持った建築であり、D字型の建築は 宗教的な機能を持った建築であった。帝国首都と してのワリ遺跡には、異なる機能を有する建築が 併存していたと言われます。

ワリの支配者っていうのがどんな姿であったかは土器に現れています。大きな壺に支配者の姿を描いたものが出土していますが、その際にはきらびやかな服を着た姿で表されています。そして、土器に描かれた支配者の特徴として非常に凝った



図 1-4



図 1-5

絵柄の上に、4つの突起がついた帽子が挙げられます。さらに、織物でつくられた貫頭衣の上着が描かれています。こういった土器に現れた証拠は実際の遺物にも残っていて、例えば先ほどの4つの突起をもつ帽子や上着は考古学的なデータとしても知られています。ある人形は金、1000km以上離れた海岸で採れたウミギク貝、さらに遠隔地から運ばれてきたトルコ石など、支配者層の権威を示す財、威信財とも言うべきものが組み合わされて作られています。

ここでちょっとワリ遺跡の外に目を向けると、 ワリ遺跡と似た建物は実はかなり遠くにも分布し てるんですね。似た建築や土器が見つかっていま す。例えばビラコチャパンパという遺跡はワリか ら 1000 km 近く離れているんですが、仕切りの 多い建築や高い壁といったワリ遺跡の中心部の建 築によく似た建築を有しています。こういった事 例は他の地域にもありますが、それをどう位置付 けるかに関して研究者の意見が割れています。そ れはなぜかというと、建築の意味付けがワリは帝 国か否かという比較的根本的な話に繋がってくる からなんです。インカの場合と異なってワリには 文字記録がないので検証は非常に難しい。だから 各地に存在するこの建築をどう捉えるのか、なか なか議論がまとまらなかったんです。これは大 体2つの立場に分かれるんですが、ワリが行政セ ンターを各地に配置して統治した証拠だと捉える と、ワリは帝国です。地方センターだと言われて いるものは実は各地で独立した別の集団が治めて おり、単に交易を通じてワリと接触を持っていた から建築が似てきた、とするとワリは帝国ではな いということになる。これまでワリは帝国ではな かったっていう論調が優勢だったんですね。断片 的な類似性しか確認できなかったので土器が似て る、建築が似ているなどという証拠としては弱い 要素をもとに議論がされてきたんです。特に支配 者層と言われる人々の証拠が薄いということに なっていた。しかし近年の発見ではそれがどんど ん覆されつつある。その代表的な事例の1つがワ リから約 200 km 離れたエスピリトゥ・パンパと いう遺跡の事例です。先ほどの宗教的な建築、D 字型の建築と政治的な建築、つまり仕切りの多い 建物の両方が確認された。さらに貴金属を用いた 豪華で巨大な胸当てや、個人に対応するマスクな どを伴った明らかに支配者層に属する人物の埋葬 が確認されたんですね。

そしてこの「ワリは帝国である」という立場に 関しては、日本人研究者の研究が新たなデータを 提示しており、今後重要な役割を担っていくとい うことが予想されます。まずは、南山大学の渡部 森哉先生の発掘でその重要性が明確になったエ ル・パラシオ遺跡が挙げられます。ここからはワ リの政治的な機能を示すような仕切りの多い建築 とワリの支配者層に関連する遺物が出土していま す。出土した土器には、ワリの支配者層の被るも のとして紹介した4つの突起のついた帽子を持つ 人物が表されています。もう1つ、山形大学が調 査を開始したトレス・パロスというワリ遺跡から 300 km 以上離れた海岸の遺跡にもこのような議 論に貢献することが期待されています。まだ一般 向けにはあまり情報が発表されておらず、近いう ちに国際誌に掲載される予定の話なんですが、ペ ルー南海岸に位置するワリの重要な遺跡です。非 常に長く巨大な日干しレンガの壁が走っており、 その周囲には非常に多くの建築が確認されている んですね。これは発見というより、60年以上前 に報告されて以来、もうなくなった、あるいは破 壊されてしまったと言われていたものを再確認し たっていうのが正しいんですけれども、表面調査 によりこの遺跡がワリ帝国のセンターであること が明らかとなりつつあります。遺跡表面の遺物か ら埋葬施設と仕切り壁の多い建築があるんじゃな いかと朧げに分かるんですね。かなり盗掘されて いますが、未盗掘の部分もかなり残っている。そ して遺跡の南端にはおそらく D 字型の建築があ ります。今後の発掘調査が必要ですが、おそらく は典型的な D 字型建築が埋もれているのではな いでしょうか。表面に落ちている土器もワリ帝国 との密接な関係を示しています(図1-6)。ワリ の中心部から出土する、蛇、あるいはムカデのモ チーフの土器の破片があります (図 1-6e)。ワリ 帝国の中心部でしか見つかっていないような土器

と同じような姿で同じモチーフが描かれているの です。人物の描かれた壺の耳の部分も確認されて います(図1-6f)。ワリ帝国の土器としては典型 的なものですので今後の発掘調査によってワリ帝 国が離れた地方をどのように支配したかが明らか になると期待されます。これまでワリ遺跡から離 れた地方のデータは断片的だったんですけれど も、ここに来て仕切りの多い建築(政治的・行政 的な支配の証拠)、D字型建築(宗教的な影響)、 そして支配者階級の存在を示唆する遺物、こう いった複数の代表的な要素が確認される遺跡がど んどん明らかになっている。だから現在はワリが 帝国だったという説が優勢になっているんです。 ここでやっぱりワリ帝国とインカ帝国の研究で考 古学の異なる面白さが出てるんじゃないかなと思 います。1つは地道な調査、つまり遺跡分布調査 であるとか発掘の積み重ねを通じた発見がそれま での定説に訂正を迫るインカ帝国の事例。そして

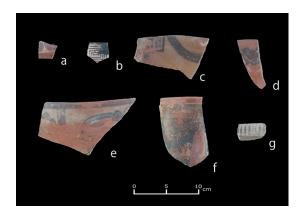


図 1-6

新たな発見が連鎖することで議論が急展開するワリ帝国の事例。そのどちらもが発見をめぐる考古学の魅力的な側面なんじゃないかと思います。そして研究者の側でも一見地味に見えるような調査がどれだけのことを明らかにし得るのかをもう少し広く示して共有する必要があると考えています。ご清聴ありがとうございました。

#### 2. 科学で探るアンデス文明

### 瀧上 舞(国立科学博物館研究員/山形大学学術研究員)

映っておりますでしょうか?大丈夫です。はい、では始めさせていただきます。ご紹介にあずかりました瀧上と申します。つい最近科博の人類研究部に移りまして、現在研究室を立ち上げているところです。本日は「科学で探るアンデス文明」と題してお話しさせていただきます。宜しくお願い致します。

さて、そもそも私がなぜ研究対象地域をアンデスにしたのかということですが、アンデス文明は文字記録のない文明であることが大きいポイントです。先ほどのお話しにもあったような、クロニカなどスペインによる征服後に歴史や文化、生態環境などを記録したものはありますが、それ以前の社会では文字らしい文字もなく、唯一キープと呼ばれる縄の位置と結び目に数値情報を記録したものがありましたが、これも十分には解読されていません。それならば遺跡から出土する考古遺物

から解読をしようと、それも化学分析で目に見えない世界を追えばたくさんの情報が得られるだろうということで、古代文明を科学の視点で読み解きたいという思いで研究を始めました。実際に分析をすればするほど、新しい・面白い情報に触れることができます。今日はその一端をご紹介したいと思います。

さて、研究の具体的な話に入る前にアンデス 地域の多様な環境についてご紹介させてください。すでに話がありました通り、アンデス文明というのは南米のアンデス山脈の周辺で栄えた文明です。アンデス山脈の尾根は標高3000mから6000m近い山が南北に連なっています。そのため非常に多様な生態環境が広がっています。例えば太平洋側の海岸地域は乾燥した砂漠環境になっています。農耕や牧畜は河川沿いのわずかな緑地帯に限られました。標高500mから3500mのア

ンデス山麓には緑豊かな地域が広がります。様々 な食物の栽培が可能な肥沃な土地となっていま す。それが標高 3500 m を超えると、寒冷で乾燥 した気候になり、栽培できる食物は限られてきま す。わずかな雑穀やジャガイモなどの塊茎類に絞 られますが、一方でリャマやアルパカといったラ クダ科動物の飼育に適した天然の牧草地となって います。尾根を超えてアンデス山脈の東斜面に入 りますと湿度が高くなり、標高1000m以下では いわゆる熱帯雨林的環境となります。このように 多様な環境のそれぞれの地域で様々な文化が興亡 し、地域間の繋がりやあるいは強力な社会の拡大・ 衰退を繰り返してアンデス文明が発展してきまし た。この日本にはない雄大な自然環境に魅せられ て、私はアンデス地域に生きた人々の生活史を調 べて行くことにしました。多様な生態環境をどの ように活用して食資源を獲得したのか、あるいは エルニーニョといったような環境変動が人々の生 活や社会発展にどのような影響を与えたのかとい うことをテーマに設定して、アンデス地域におけ る人類と自然の関わりを探求しています。具体的 には、アンデス文明における食資源獲得戦略の時 代変遷というのを調査していますが、例えば、ト ウモロコシの利用の広がりですとか海産資源利用 の方法、ラクダ科動物飼育の伝播など、時空間的 広がりをもって生業活動を調べています。もう少 し噛み砕いて言いますと、昔の人がどこで暮らし たのか・何を食べていたのか・食べ物はどうやっ て入手していたのか・彼らは旅をしていたのかと いうような古代の人々の生活史の復元をしていま す。今日は時間が限られていますので、何を食べ ていたのかという話に絞って研究紹介をしていき たいと思います。

さてアンデス文明で食べられていた食物にはどのようなものがあるでしょうか?現在の市場を歩くと多種多様な食物を目にすることができます。 魚介類、様々な種類のジャガイモ、塊茎類、それから豆類、唐辛子、カラフルなトウモロコシなど見ていて飽きません。また家畜では、現在はウシやブタ、ニワトリが多くいますが、昔はリャマやアルパカ、また現地でクイと呼ばれる食用モル

モット (テンジクネズミ) がいました。では昔の 人が食べていた食物はどうやって推定するのかと 言いますと、方法の1つは遺跡から出土する食物 残渣の調査です。例えば植物性の食べ物の食べ残 したところ (種・皮など)、あるいは動物や魚な どの骨、貝殻の部分などもあります。また土壌中 に含まれる花粉や植物珪酸体ですとか、歯に付着 した歯石の中に残っているデンプン粒、あるいは 歯石中には食物の遺伝子情報なども残っており、 摂取された食物の推定に用いられています。また 土器や織物、それから石柱に残された図像などに も食物情報は記録されており、その当時遺跡にど んな食物があったのかということを推定する方法 はいろいろあります。しかしそれぞれの個人が「何 をどのくらい食べていたのか」という情報はそれ だけではわかりません。人によって好みの傾向も あるでしょうし、旅をしていた人や他の地域から 来た人ならば、その遺跡からは出てこないものも 食べていた可能性があります。ではどうするの か?直接その人の体に聞いてみればいいんです。

人の体というのは食べたものから作られていま すので、骨やミイラなどの様々な体組織を分析す れば、「何を食べてその体が作られていたのか」 という情報を得ることができます。私たちの人の 体からどんな情報を得るのかご説明します。私た ちが食べた食べ物は胃や腸を通ることでアミノ酸 まで分解されます。それらは肝臓や血液中に蓄え られ、必要に応じて血管を通じて体内中を運ばれ て、各部位で必要なたんぱく質を形成します。筋 肉はもちろん、爪や髪などを形成するケラチン、 骨や皮膚を構成するコラーゲンもタンパク質の一 種です。人の体組織を構成している元素の中で、 炭素と窒素は、それがもともとどんな食物だった のかという「同位体比」情報を有しています。そ こで古人骨の炭素と窒素の同位体比を分析するこ とで、何を食べたのかという情報を得ることがで きます。

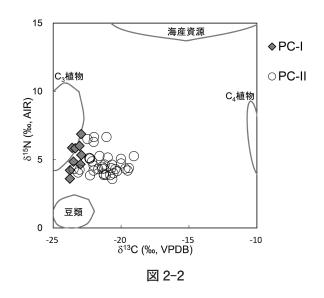
同位体については最近では高校化学などで出て くるのでしょうか?ご存知かと思いますが簡単に ご説明しますと、同じ元素で陽子数が同じで、中 性子数が異なる原子のことを同位体と呼びます。

同位体は僅かに重さが異なっています。ここに示 しているのは炭素の同位体の例ですけれども、こ の重い炭素と軽い炭素の割合を炭素の同位体比と 呼びます。食物は光合成回路の違いや栄養段階の 違いから異なる炭素・窒素同位体比を持ついくつ かの食物グループに分かれます。こちらの図はア ンデス地域で得られる食物の同位体比で、横軸を 炭素の同位体比、縦軸を窒素の同位体比にしてプ ロットしたものになります(図2-1)。アンデス 地域のほとんどの栽培食物はC。植物に含まれま すが、トウモロコシとアマランサスは C4 植物と いう、高い炭素同位体比を示すグループに入りま す。また C<sub>3</sub> 植物の中でも窒素固定菌を有してい る豆類は、窒素同位体比が他の C<sub>3</sub> 植物よりも低 くなっています。海生生物は高い炭素・窒素同位 体比を持っています。人の体組織には食物の同位 体比が混合して記録されていて、より多く摂取し た食物の値に近づきます。例えば魚を多く食べた 人の体組織の同位体比を測りますと、高い炭素・ 窒素同位体比を示して海生生物の値に近づきま す。このようにして古人骨の炭素・窒素同位体比 を分析すると、「何をどのくらい食べていたのか」 という食性推定ができるわけです。

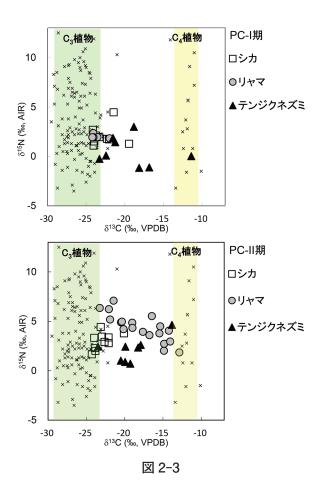
この分析方法で明らかになった古食性研究の事例を1つご紹介したいと思います。分析対象としましたのはペルーの北部高地にあります、標高2500mに位置するパコパンパ遺跡です。アン

25 魚類,貝類,海獣類 海産物 20 (窒素同位体比) 8<sup>15</sup>N (‰, AIR) 9 01 15 C,植物 トウモロコシ 0 リマ豆,等 -20 -15 -10 -5  $\delta^{13}C$  (‰, VPDB) (炭素同位体比) 図 2-1

デス形成期を代表する巨大祭祀建造物の1つで、 1960年代より発掘調査が始まりました。この遺 跡から出土した紀元前 1200 年から紀元前 700 年 にわたるパコパンパ I 期、紀元前 700 年から紀元 前400年にわたるパコパンパ II 期の人骨と動物 骨の分析を行いました。人骨の分析結果がこちら です(図2-2)。黒い菱形マークでパコパンパ I 期を示していて、白い丸マークでパコパンパⅡ期 を示しています。図に示されていますようにパ コパンパⅠ期に比べて、Ⅱ期になると炭素同位体 比が上昇しており、C<sub>4</sub>資源の利用が増加したと 考えられています。C4資源とは直接的・間接的 な C4 植物の利用を指します。直接的に利用でき る C<sub>4</sub> 植物は何かと言いますと、アンデス地域で はトウモロコシとアマランサスが存在すると先程 お話ししました。パコパンパ遺跡でのデンプン粒 分析では、トウモロコシだけが検出されていま す。一方、間接的な C<sub>4</sub> 植物利用は、C<sub>4</sub> 植物を食 べた動物の肉の利用を指します。パコパンパ遺 跡に C<sub>4</sub> 植物を食べていた動物はいたのでしょう か?そこで動物の食性推定も行いました。シカと リャマとクイ (テンジクネズミ) の分析を行って います。上の図がパコパンパⅠ期の動物、下の図 がパコパンパⅡ期の動物の同位体比データをプ ロットしたものになります(図2-3)。上のパコ パンパ I 期では黒い三角マークで示したクイの中 に C<sub>4</sub> 植物を多く食べる個体が見られました。下 のパコパンパⅡ期ではクイに加えて、グレーの丸



マークで示したリャマも  $C_4$  植物を食べています。動物骨の出土割合や1 個体から得られる肉の可食部の量を考えますと、パコパンパII 期にヒトの間接的な  $C_4$  植物利用に大きく寄与したのはリャマだったと考えられます。さらにアンデス地域の2000 m 以上の高地では野生の  $C_4$  植物はほとんど存在していないため、標高 2500 m に位置するパ



コパンパ遺跡周辺の植生では、パコパンパⅠ期の 個体と同じような C<sub>3</sub> 植物の寄与の大きい食性が 動物に示されると期待されました。しかし実際に は、動物は C4 植物を食べていたという結果から、 栽培されたC4植物、つまりトウモロコシを食べ て育った可能性が考えられます。まとめますと、 この研究ではアンデス文明初期の形成期における トウモロコシ利用の時代変化を初めて報告した研 究となりました。パコパンパ遺跡では形成期中期 にはすでにトウモロコシ栽培が始まっており、ク イの飼育にも用いられていたことを突き止めたの は新しい知見となります。さらに形成期後期の人 の食性変化はリャマへのトウモロコシ利用の影響 が大きいことも明らかにしました。直接的・間接 的なトウモロコシ利用の増加の背景には、トウモ ロコシ畑へのラクダ科動物の糞の施肥などの栽培 促進が行われた可能性も指摘することができ、農 牧複合の生業形態が人の食性変化に大きく影響し たと推測されます。

形成期後期の食性変化について先行研究の他の遺跡の食性と比較してみるとどうでしょうか(図2-4)。形成期中期までがこちらの左の図、形跡後期から末期が右の図になります(図2-4左側の二対の図)。パコパンパのデータを黒い丸マークで示していますが、同じように形成期後期に高い炭素同位体比を示す遺跡が2つ出現しています。このような形成期後期の食性の時代変化というのが

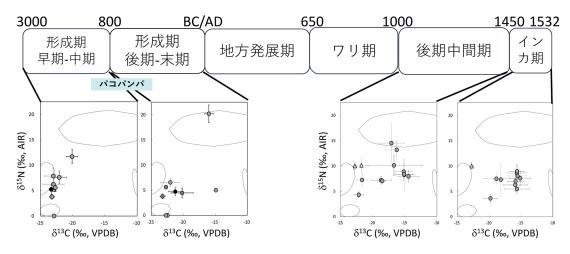


図 2-4

広域的な傾向として捉えられるのかどうか、他の 遺跡でも時代変化の調査を続けています。

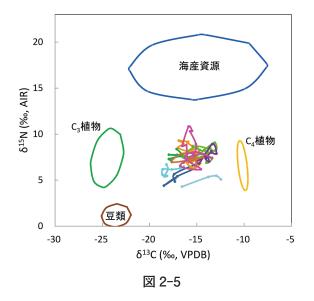
それから次に広域的視点での食性の時代変遷を 見てみます。上に示しているのはアンデス文明の 大まかな年表になります。先のパコパンパ遺跡は この辺りの時期(形成期中期~後期)にあたりま す。この食性の変化は、アンデス文明がどんどん 進んでいくとどうなるのかということを示したの が、最後のインカ期と、その1つ前の時代で後期 中間期と呼ばれる期間の食性の図です。こちらの 2つ(後期中間期とインカ期の図)になります(図 2-4の右側の2対の図)。後期中間期と呼ばれる 時代には、それぞれの遺跡・地域が特徴的な食性 を持ってまとまっていることが示されています。 それがインカ期になりますと、海産資源の利用が 全体的に減り、また炭素同位体比が上昇している ことがわかります。食性の地域差というものが少 し減ってきています。これはインカが征服した地 域でトウモロコシ農耕を奨励したことや、資源開 発のために人を移住させたことが影響して、広域 的に似通った食性に向かう傾向になっているのが 現れていると推測されます。この2つの時期の食 性変化というのは、各地域の生態環境に適応した 食資源獲得戦略が形作られ、その後の社会変化に よって新しい資源に変わっていく過程を描き出し ていると思われます。このような通時的な食性の 変遷や地域内外での食性の多様性についての調査 は今も継続しています。

別の古食性推定の事例をご紹介したいと思います。分析対象はミイラです。ミイラの毛髪を分析したお話です。先に「アンデスの多様な環境」でご紹介しましたように海岸地域は乾燥した砂漠環境になっていて、人を埋葬すると自然とミイラになって残ります。地上絵で有名なナスカ地域にも多くのミイラが残されています。分析対象としたのはナスカ時代よりも1000年ぐらい後のイカ期と呼ばれる時期にあたるチャウチーヤ遺跡のミイラになります。ここの遺跡ではミイラがいろいる展示されているのですけれども、その毛髪を使って食性推定を行いました。毛髪は先程ご紹介した骨の分析とはまた違った面白さがあります。骨と

いうのは組織の代謝回転が遅いため、数十年分の 食性を反映していると考えられています。しかし 髪の毛は、個人差もありますが、大体1ヶ月に 1cm 程度伸びていきます。そして1度伸びると 体内に戻るということもなく、髪の毛を切るまで はずっと伸び続けます。頭皮から 12 cm の長さの ところは、つまり1年前に食べた食べ物の値とい うものが反映されているわけです。もっと長けれ ばもっと前の時期の食性も残っています。この髪 の毛からどのように記録を読み取るのかと言いま すと、例えば、最近の4ヶ月ほどジャガイモや豆 類を多く食べていたとすると低い炭素同位体比・ 低い窒素同位体比が記録されます。4ヶ月前から 8ヶ月前までの間に魚を多く食べていますと、炭 素・窒素同位体比が高くなり魚の値に近づきます。 さらに8ヶ月前から12ヶ月前までの間にはペルー 旅行でもしてトウモロコシを多く食べたとなる と、高い炭素同位体比を示して、そして12ヶ月 前から14ヶ月前には今と同じようにジャガイモ と豆類を食べていた場合、初めの値に戻るという ような変動を示します。このように毛髪というの は連続的に分析することで過去に遡って食性の連 続的な時間変化というものを見ることができるわ けです。チャウチーヤ遺跡のミイラから採取した 毛髪について、2cmごとに切って食性の連続的 な変化の分析を行いました。図はそれぞれの色が 1個体のミイラを示していて、1つ1つの丸マー クが2ヶ月分の食性を表し、線で繋がれているの は連続的な食性の変化を示しています(図 2-5)。 この図からわかるのは、まずは(線が)この4夕 イプの食物のほぼ真ん中に描かれているというこ とから、全体的に C<sub>3</sub> 資源も C<sub>4</sub> 資源も海産資源も バランスよく食べていたということが推測されま す。ただどちらかというと、中心より C<sub>4</sub> 資源側 に少し寄っていますのでトウモロコシを多めに食 べていたような時期もあったということがわかり ます。1人の個体で季節によって多く食べられる 時期とそんなに食べられない時期もあったという ことが推測されます。さらに海産資源を食べた量 というのは人によって全然違っていまして、ある 人はこの1時期だけ高い窒素同位体比を示すデー

タが3つあるので、半年間ぐらい高い海産資源の 摂取があったと考えられます。例えば、より海に 近いような地域に行って一時的に滞在し、その間 に多くの海産資源を食べるような生活を送ったか もしれない、ということをこのデータから読み取 ることができます。今示していたのはイカ期の食 性ですけれども、地上絵を描いたナスカ時代の人 の食性と比較するとどうでしょうか?

先行研究で報告されているナスカ期の人たちの 食性を比較しました。まずチャウチーヤ遺跡でも イカ期の方がトウモロコシ側、高い炭素同位体比 側にぐっと伸びています。つまりナスカ期の人た ちよりも、より多くの C4 植物を食べることがで きたということが推測されます。次にナスカ期は 人によってだいぶ食性の個体差があるようです が、イカ期の個体はナスカ期に比べると個体差が 少ない傾向になっています。ただし、1年間に食 べていたもののばらつきの具合というのは、ナス カ期の個体よりも非常に大きくなっています。技 術の発展でトウモロコシを多く作れるようになっ たのかもしれないですし、気候が変化して温暖・ 湿潤になったことでトウモロコシが多く栽培でき るようになった可能性も考えられます。もしくは 社会が発展して人と人とのネットワークが強化さ れてコミュニティが広がったことで、様々な食物 が社会の中を循環するようになった可能性もあり ます。様々な理由が考えられますけれども、これ



らのデータだけではまだ何が要因だったのかはわかりません。社会状況やその交流地域、あるいは古環境推定などさまざまな研究者の調査結果と合わせて、食性の時代変化の要因というものを考えていくことが重要になります。研究者というのは1人で研究しているようで仲間と一緒に謎解きをしていくような面白さがあります。

さて、そろそろまとめに入ります。今日は時間 が限られていましたのでごくごく限られた研究紹 介しかできませんでしたが、生活史復元には他に も様々な方法があります。色々な元素や体組織の 組み合わせがあります。これらの組み合わせで多 角的な食性推定や出身地推定ができます。産地推 定などもできます。あるいは貝や木などの年輪、 土壌から古環境を復元することもできます。どの 考古遺物を分析して何の測定をするのかで得られ る知見の幅が広がります。また毛髪のように数ケ 月の食性情報を持つものもあれば、骨のように数 年・数十年単位のデータを持つものもあり、遺跡 の時代差などでは、数世代間の食性の違いという ことも推定できます。同じ時代の別の遺跡を分析 すれば空間的な広がりもあります。つまり最初に お話しをしましたように、分析をすればするほど 新しい・面白い情報に触れられるわけです。この 面白さが少しでも皆さんにお伝えできていたら幸 いです。私の話はここまでです。ありがとうござ いました。

伊藤)はい、ありがとうございました。現在のところ Q & A から質問等がございませんのでまた皆さん遠慮せずに Q & A の方で質問をして頂けたらと思います。ディスカッションの方で取り上げたいと思っております。それでは瀧上さんどうもありがとうございました。次は『古代マヤ・アステカ不可思議大全』などイラストと分かりやすい説明でマヤやアステカの著作をお持ちで、今度はインカについて著作を発表される予定の画文業の芝崎さんにお願いしたいと思います。芝崎さん共有の方を始めてください。

### 3. 門外漢による気楽なマンガ的世界

## 芝崎 みゆき (画文業)

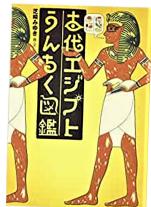
こんにちは、初めまして。本日はお話しする機会をいただき、ありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。まず自己紹介させて頂きますと、わたくし、芝崎みゆきと申しまして、これまで古代文明に関する本を4冊書きました。古代アメリカ学会に関連付けられるものとしては、マヤとアステカ文明の本があります(図3-1)。

さらに今回インカとアンデス文化の本も先程ご紹介にあずかったように出すことになり、つい最近作業が終わったところで今一息ついておりまして、どっぷり古代アメリカの文化に私自身が浸っている真っ最中です。これはまだ出てないのですけれども新しい本になります(図 3-2)。

本の形態は私の本日のお話のタイトルである

「門外漢による気楽なマンガ的世界」のようなものです。このように、絵を差し挟みながら、文字は手書きで、古代文化の神話や歴史の流れを追っていくというものになります(図 3-3、図 3-4、図 3-5)。

本日はこういった本を作るようになった経緯や、本を作っていくうえでの試行錯誤のお話、さらに古代アメリカ文化への思いを述べさせていただこうと思っております。他の先生とは甚だ話のテイストが違って極めて個人的な話のラインナップで恐縮ですが、研究者の先生に私という一般人のサンプルを通して、普通に生活している者にはどれだけ中南米の文化が浸透していないか、しかしちょっとでもそれに触れるとたちどころに夢中にさせるものであるかということを再認識してい



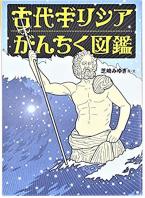






図 3-1





図 3-2





図 3-3







図 3-4





図 3-5

ただければと思います。また若者の方などは、誰 でも少なからず本を作ろうと考えたりするものと 思われますので、何かの参考や反面教師にしてい ただければと思います。

現在、人類学や考古学、歴史学などの研究者さ ん、大学でそれらの学問を専攻している学生さん は、早いうちからその面白さに気付いていて羨ま しい限りです。そんな若いうちからなんと見識や センスがあるのか、どんな生育環境にあったらそ こに行き着くのか、ほんと詰め寄って問いたいく らいです。

自分の場合はモノをあまり知らなくて、そもそ も古代文明・歴史に学生時代ハマったということ もありませんでしたし、周りにそんな友人もいま せんでした。テレビの『ふしぎ発見』を観た記憶 もなければ、古代文明という言葉すら自分の声帯 から発したことがなかったと記憶しています。メ

ジャーなエジプトですらクレオパトラやピラミッ ドくらいしか知りませんでした。マヤ・インカ・ アステカなんて聞いても大抵の人たちと同様、場 所も知らなければ区別もつかずといったありさま でした。

それが30歳頃トルコに旅行に行くことになり まして、その時、事前にシュリーマン(トロイ遺 跡の発掘の人)の自伝、有名な『古代への情熱』 を読みました。それでトロイ遺跡に行った時、と んでもなく興奮しました。「この風の強さがシュ リーマンにここをトロイだと確信させたんだ」と か、神話のトロイ戦争の名場面をそこらじゅうに 当てはめたりすることで、内側からボワッと火の 玉みたいなものが飛び出るような感覚になったん です。

トルコは見応えのある遺跡がたくさんあるとこ ろですけど、トロイ遺跡は残りが悪く、ビジュア ル的にふるわず、その名声に反してよくがっか りする遺跡の代表格として挙げられているのは、 皆さんもよくご存知のことと思われます(写真 3-6)。しかし私にとってはトルコでもっとも感激 した、かつもっとも好きな遺跡となりました。そ れはシュリーマンの執念の発掘物語やトロイ戦争 の神話を知っていたからであり、人間ドラマや バックグラウンドを知ってから行くかどうかで、 テンションの上がり具合・楽しみ方が大きく変 わってくるのだなと初めてわかりました。それで 友だちにも古代文明・古代遺跡の面白さを知って もらいたいとお節介に思いまして、そこからどう

せならもっと多くの人にも(知ってもらいたい)、 とどんどん願望が広がっていき、そうすると『本』 という形にした方が説明しやすいと思いまして、 やってみることにしました。

どうしたら自分レベルのさほど古代文明に興味のない人間に耳を傾けてもらえるのかと考えましたら、日本という世界一の漫画文化王国に生まれ必然的にそのシャワーをずっと浴びてきた者としましては、自分だったらまず絵が付いていたら話を聞いてやろうかい、となると思いました。しかし絵に関して完全な素人で、漫画を描く下地がまったくないので、テキストをメインにして絵は軽く添えるものとしました。

今日のお話しのタイトルも「マンガ的」とわざ わざ「的」を入れて濁してるのも、これが漫画だ、 などとおこがましいことはとても言えないからで す。何しろ漫画を描くというのは本当に本当に大 変なことで、この世で最も過酷な仕事ですので。 それもあって漫画家という職業を私は1番リスペクトしております。

話を戻しまして、絵を付けることで何か入り口が気楽な感じになれば、人も入ってきやすいだろうと思いました。絵は先ほど申しましたようにまったく描けません。今視聴くださってる皆さんの方がずっと描けると思います。が、このように遺物や遺跡をそのまんま書いて紹介するページも多いんですね(図 3-7)。ですから素養のない者でもなんとかごまかせます。

また、もう1つのちょっとしたこだわりポイントである手書きの文字ですけど、自分は妹尾河童さんの手書きの本が好きでして、その時は手書きの本を求めて、まるで興味のなかった分野の本を買い、読み漁った経験がありました(図 3-8、図 3-9)。



しょぼい遺跡として 定評のあるトロイ。 いちばんの目玉は 観光用に作られた木馬。



図 3-6



ARRONANTES, BRITISTES, BECHTONIA TO SERVICE STREET, ARRONANTES, BRITISTES, BR

図 3-7



河童 が明いたインド (東京) 日本の (東京) 日本の

やなぎもとなおさんの本ド・センスもスパラシー





図 3-8

図 3-9

なぜ自分は手書きの本に惹かれるのかというと、手書きの文字がちょっと引っかかるというか読みにくいからだと思うんです。そのことが逆に良くて、集中して読むことにつながるのではないかなと思っています。

最近テレビで知った言葉に「不便益」という言葉があります。それは不便であるがゆえの良さという意味だと自分は解釈していて、手書きっていうのもそういうことじゃないかなと、いいように―――これは後付けではありますが――――思いました。とにかく自分が出来る範囲でまったく興味のない人を引き込むフックが1つでもあれば、と思いました。

そういったハード面よりやはり内容こそが1番 大事なのですが、こちらの腕がぜんぜんなくとも、 もともとこれらの文化のありようや発想、考古学 者の情熱や考察、発掘品や口づてに伝えられた神 話・歴史、そこから垣間見える人間ドラマなどを 紹介するだけで面白さや魅力は大丈夫だと思いま した。

それで再びこのお話のタイトルに戻りますが、こちらは門外漢という気楽な立場ゆえにいろいろな利点があります。ちゃんとした研究者さんなら絶対取り上げないような説・話をポンと取り上げてみたり、脱線したり、思い切ったことをやれるし言えます。またちょっと詳しい人から見ると、なんだ今頃そんなことに驚いて、ということも恥ずかしげもなく存分に驚けます。

でも専門分野の話をこんな門外漢・にわかが書いていいのかというところもあります。と、そんな発想は私にはなかったんですけど、原稿の持ち込みをしたとある出版社で、専門的な学業を修めてない人はこういうの書いちゃいけないよ、と咎められたことがあったんですね。そういう考えもあるのかと初めて知りました。

でも私はにわかで門外漢であるからこそ描けることもあると思いました。一般の人が何を知らず何を知っているか、そして何がどうなると頭がいっぱいになって付いていけなくなるか、またどれほど論理的な文章に弱いのか、などが自分自身からよく理解できるからです。

それらの利点と逆に門外漢ゆえに苦労する点といえば、どうしてもわからないことが出てきて詰まった時、ちょっと誰かに聞けるようなつながりを一切持っていない点でしょうか。しかし原稿を実際描き起こす時は、研究者の方にチェック頂けるという幸運な時間があるので、それもそこまで問題ではありません。またそれまで頼るのは文献のみで、作業のうえでは読むということが1番時間を費やすことになります。そして原稿にする時は研究者の方たちが心血注いで追い求めたものを使わせて頂いてるので、薄い氷の上を歩むように慎重にならねば、とは心がけております。このことは特に今回の本で考証のチェックをしてくださった先生の姿勢から学びました。

それにしてもこのように文献を読んで探求し理解していく時間こそがパズルが繋がった時の興奮も味わえますし、1番楽しい時間というかボーナスタイムだとこの門外漢は思っております。この期間に入っている時は本当に時間がびっくりするほど経ってしまって、しばしば浦島太郎的な気分に陥りました。

最後の話題になりますけど、目下、私の心の矛 先は古代アメリカに向かっておりまして、冒頭で 申し上げましたとおり、中南米文明に連続で関わ らせていただきました。古代アメリカはどこでも とんでもない面白さのポテンシャルを秘めてい て、例えばビジュアル面にしたって目を見張るも のがざっくざくあると思います。

ナスカ文化が地上絵だけではなく、こんな漫画みたいな可愛い土器を作っていたなんて当然、まったく知りませんでした(図3-10、図3-11)。

モチェ文化は少しだけ知っていました。もちろんもともとはまったく知らず、先ほど申しましたトロイで、にわか古代文明ファンになって以来、古代文明の本を片っ端から読むようになってから初めてその名を聞きました。太陽のワカと月のワカというロマン溢れるネーミングの巨大建造物を作っていて、生々しい肖像土器も作っているということは知りつつありました(図 3-12)。が、こんな豆人間やカニとかトウモロコシなどの作物に変身しまくる神がいてその土器が大量に作られて

いたなんてのも、アンデスに実際行く前後に初めて知ったことでした(図 3-13)。

なのでシパン王墓というとてつもなくユニーク な墓の存在ももちろん知らず、ペルー旅行の時も ノーチェックで行かずに帰るところでした。でも あまりにもそこで出会うペルーの人たちが、二言 目にはシパンは行ったのか、なんでまだ行ってな いのかと強力にプッシュしてくるので、それほど 言うなら行くか、と重い腰を上げて行ったので す。そうしたらまさかのツタンカーメン墓で、黄 金も凄いですし、あまりにもユニークというか奇 天烈なキャラクターが満載で、こんなすごいとこ ろを飛ばさずに墓と副葬品をちゃんと見られたこ とに命拾いの思いで、また何と幸運だったのだろ うと勧めてくださったペルーの人たちに感謝いた しました。私はアンデスの旅行で1番凄くて好き だったのがシパン関連の遺跡と博物館です(図 3-14)

それで「ちょっとメディアは何をやっているんだ、怠慢じゃないか」、「もっとちゃんと言って、もっと取り上げてくれないと困るよ」と思ったんですね。シパン王墓の展覧会も2000年度に日本であったようですけど、普通に生活している自分の耳には入ってきませんでした。一般の人だってアンデス文明に触れてる方や博物館によく行く人はご存知でしょうけど、それ以外のほとんどの人はまったく知らない。知っていたら絶対興味を持つはずだと思うんですけど。

ミイラがこんな怪人たちがたくさんいるマントを羽織ってるなんて知りませんでした(図 3-15)。こんな可愛い絵が一面についている織物がたくさん出てるということも知らない(図 3-16)。

なんだかもうどんどん「知らない自慢」みたい になってきたんですけれど、古代ローマ・ギリ シャ・エジプトと聞いて、どんな人も左側のよう



図 3-10







図 3-11



図 3-12





図 3-13

なもの(エジプトの壁画・ギリシャの彫像)がアイコン的に頭に浮かびます(図 3-17)。アンデス・南米文明と聞いてこの右のものが思い浮かぶ人は数%だと思います。判官贔屓の自分としてはやはり加勢したくなりますし、この面白さを古代ローマ・ギリシャを知るレベルには知ってほしいと思うし、もうテレビやメディアも本当に責任もってしつこいくらいに推してほしいと思います。

日本は立派な発掘隊とか研究隊も組織され、特にアンデスに関しては意外に文献も少なくないっていうのも今回知った次第ですが、楽しく学ぶ機会において案外他の国と比べて恵まれた環境にあると思うんですね。でも文献・情報には限られた人しか行きつくことができないようになっていると感じます。というのもやはり古代アメリカのおもしろさの内容が世間にはぜんぜん浸透してないからですよね。自分の本も一般の人がそういった真に面白い研究に行き着く一助になりたいなんて

壮大な図々しさを持ってるんですけども、とてもうまくいってるとは言えません。先ほど述べらみも実際まったく人を引き込むツールとはなっておらず、むしろ読みづらいとそっぽを向かれたりします。また素人ゆえに、人が何にも知らないことを知っている、などと先ほど利点を高らかにあげておりましたけど、そうそう理想通りには行かず、説明がへたすぎて読んでくれる人を置いてけぼりにしたり、主観が強く出すぎているなどとお叱りもたくさん頂きまして、日々反省をしております。お叱りを受けるのはまだいいほうで、なんといってもやはり空気の存在で、敷居を低くして呼び込もうとしても、そもそもまったく存在しないものとなってます。

でも私は信じたいのです。自分の書いた本は蒔かれた種の1つであって今はチリやホコリとかそれ以下の微生物サイズの種であっても、少しでも、



図 3-14



図 3-15

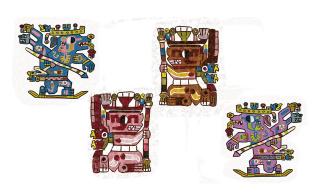


図 3-16



図 3-17

サブリミナル効果的にでも、人々の古代アメリカ 文化への関心や興味・好奇心をつついてくれるは ずだと。そう信じたいです。

ということで無理矢理まとめた感じになりましたけど、本日は本当にお時間をいただきありがとうございました。ご清聴ありがとうございました。

- 伊藤)はい、ありがとうございます。質問がありますのでお答えいただきたいと思うんですけれども「義務教育時代の歴史教育歴史試験などが日本における若者の歴史への関心を遠ざけている要因ではないかと言われて久しいですが、文部科学省や教育現場に望まれることは何ですか?」という質問ですが、いかがでしょうか?
- 芝 崎) これは全体で考えるような凄い内容で、 私には荷が重いですね(笑)。

教科書は羅列にならざるを得ないですが、例えば先週のメソアメリカ編で伊藤 遊先生のテーマであった学習漫画などは いいですよね。事例の羅列ではなく、人 間ドラマ的なエキスが少しでも入ると、 人は歴史に関心を持つと思います。先日、 直木賞を獲った佐藤究さんの小説『テス カトリポカ』が売れて、それを読んだ 人々がアステカ文明に突然目を向けたよ うに。これは私なんぞではなく、もっと 他の人に聞いてみたい問題ですね。

- 伊藤)あと1つだけ時間があるのでお聞きしたいと思いますけれども、「神経学の医師です。モチェ文化のスライドの右上の写真ですが、この中年男性が半分目を閉じてにやけている表情はメージュ症候群という顔面の病気ではないかという説を出している人がいますがどう思われますか?私は普通ににやけているだけだと思いますが、いかがでしょうか?」
- 芝 崎) これも(古代アメリカ学会の) 皆さんが 詳しいのではないかと思いますが(笑)、 モチェ文化は病気の人を象った土器があ るのは有名で、でもこれ(スライドの写真) は私もにやけているだけだと思います。

# 4. アンデスにおける「遺跡博物館」の成果と課題~ペルー・アンコンでの活動経験を中 心にして

市木 尚利(立命館大学環太平洋文明研究センター・プロジェクト研究員)

よろしくお願いします。立命館大学の環太平洋 文明研究センター・プロジェクト研究員として研 究を継続させていただいておりますが、平日は姫 路にあります姫路女学院中学校・高等学校で常勤 講師をさせて頂いていております。そこで様々な 生徒たちと出会い、社会科の教員として SDGs や 国際教育に関わる日々を送らせていただいており ます。

本日の内容ですが、ペルーのアンコンにあります「遺跡博物館」での活動を中心にお話したいと 思っております。

本題に入る前にアンコンの場所について確認し たいと思います。アンコンはペルーの首都から沿 岸沿いに北へ約 40 km のところにあります。海 に面している町で、一面砂漠となっている場所に なります。ここは漁民たちが伝統的に生活してい る場所となっております。

タイトルに入っております遺跡博物館という用語についてですが、スペイン語の Museo de Sitioをそのまま「遺跡博物館」と訳しております。日本でも出版物や論文がいくつか出ておりますので、関心持っていらっしゃる方が多いのではないかと思います。遺跡に付随して建てられ、その遺跡から出土した出土品を展示し、地域の小中学校を含め地域への普及啓発活動を行う役割を担っています。また、遺跡博物館では、遺跡の個性あふ

れる歴史を知ることができるため、新しい発見や 驚きがあるのではないかと思います。

それは基本的にペルーでも変わりはありません。ペルーの場合、遺跡のある場所に博物館を建てようという動きは1930年代からあると言われています。ペルー考古学の父といわれる、テーヨ博士がおられましたが、彼の論考の中に博物館について述べたものがあります。博物館の役割は大変大切なものであったと考えられます。アンコン遺跡博物館(図4-1)も1960年代には設立構想がありました。遺跡博物館の建設が実現するのは1990年代に入ってからとなりますが、遺跡を守っていくことに加えて、遺跡からの出土品を展示して地域に還元していこうとするものとして大事な役割を果たしていくことになったと思います。

法律の面で、国際条約、米州機構が定めている協定からペルー国の法律まで様々なレベルで文化財保護について触れた法律があります。ただし地方自治体のレベルとなると、常駐の研究者はいないですし非常に弱くなっています。そのような地方の実態から考えると、遺跡博物館が果たしている役割は大きいように思います。

それでは最初にアンコン遺跡博物館での活動についてお話させていただきたいのは同博物館所蔵の考古資料整理、新たな展示室開設、デジタルカタログ作成というプロジェクトについてです。これは私自身が立ち上げたプロジェクトではなく、ペルー・カトリック教皇大学とアンコンの遺跡博物館を経営するアンコン文化協会が協定を結んで実施されたものです。長年、収蔵庫で整理され

ずになっていた考古資料をデジタルカタログに し、みんなで共有できるようなものにしていこう というプロジェクトでした。このプロジェクトは 2009年に始まりました。私も3年ほどプロジェ クトに参加しました。

このアンコンにネクロポリス・デ・アンコンと呼ばれる遺跡があります(図 4-2)。この遺跡での発掘調査が始まるのは 19世紀に遡ります。鉄道建設をきっかけに、たくさんの墓が見つかって調査が始まっていきます。当時からペルー古代史研究において、非常に注目される遺跡になっていました。2・26事件で殺害された高橋是清も若い時にこの遺跡を訪れて遺跡の調査と出土品の見学をしています。貴重な遺跡ですが、ゴミが廃棄され活用もされていないのが現状です。

私が参加したプロジェクトが何を実施したかについて簡単に申し上げると、未整理のままになっていた土器、織物、木製品、貝製品、金属器などが保管されていた収蔵庫を、収蔵庫兼展示室として改修し、一般の方にも開放し、見学できるようにする作業を行いました。収蔵庫に未整理のままになっていた人骨や織物などがまとめて入れられていた箱を1つずつ丹念に調べ記録保存の作業を行いました。結果、収蔵庫でありながら展示室でもあるため、一般の人にも常時見学していただけるようになりました。

デジタルカタログは土器、石器といった種類ごとに作成しました。それをウェブサイトで公開してたくさんの方々に見て頂けるようにしました。



図 4-1 アンコン遺跡博物館



図 4-2 ネクロポリス・デ・アンコン遺跡

これをホームページで見ることができるようには してたのですが、現在は残念ながら、コロナ禍の 中で少しウェブサイトの方が繋がりにくくなって おり、ホームページで見ることが難しい状況と なっています。

収蔵庫で未整理となっていた考古資料が面白いのは、40年近く手つかずになっていた出土品を丹念に観察していくとそれまでわからなかったことがわかってくることにありました。私自身新しい発見や驚きがたくさんありました。その新たな知見を社会のために活用していきたいと考えました。そのため、このプロジェクト後、私が個人的に派生させた活動があります。その活動を次に紹介したいと思います。

例えば、リマ市内に住む「働く子どもたち」を 遺跡博物館へ招待する活動を行いました。普段学 校に行けない「働く子どもたち」が沢山います。 女の子が多いです。私は2006年からペルーに渡っ た時、NGOの活動にも関心を持っていたので、 考古学研究の傍ら NGO のボランティア活動にも 参加してきました。その NGO の活動で知り合っ た子どもたちを、私がこれまで勉強してきた博物 館へ招待したいと考えました。普段学校へ行くこ ともままならないような子どもたちや、学校に行 くことができても帰宅後は家事をし幼い弟や妹の 面倒見ている子どもたちがたくさんいます。そう いった子どもたちを NGO の人たちと一緒に協力 して、遺跡博物館へ招待しました。ペルーの働く 子どもたちは約200万人いると言われています。 ペルーには小学生から高校生まで年齢の子どもた ちが600万人ほどいるのですが、1/3は働いてい るため卒業できずにそのまま退学し、義務教育も 終われない子どもたちがいます。博物館への招待 は、少しでも地域の歴史文化に関心をもってもら うことと、いろんな人たちのつながりも作ってい ければと考え行いました。様々な人たちの相互協 力によって地域社会は成り立っていることも感じ 取ってもらえたらと思い、博物館への招待活動を 2年続けて行いました。

その他には国際交流の機会にもしていきたく、 私が立命館大学の出身ということで立命館大学 の考古学のゼミにいる学生さんたちが2015年・2016年と2年連続でアンコンまで足を運んでくれました。マチュピチュへは行かずにアンコンまで来てくれて、一緒に博物館に所蔵されている土器の調査をし、研究者の方々と交流の機会を持つことも叶いました。

また、ペルー国家自然保護管理事務局とロマスとその生態系保護を行う市民団体とのつながりをつくることもできました(図 4-3)。アンコンをはじめペルーの海岸には、ロマスと呼ばれる現象が見られます(図 4-4)。図 4-4 はアンコンではなく、ルクモと呼ばれる地区のロマスです。ロマスというのは、砂漠の中に一時期植物が繁茂する現象のことをいいます。主に6月から11月にかけて見られるものになります。12月から4月までは植物がない状態ですが、6月以降になると一面に植物が繁茂するようになります。このロマスには野生種のジャガイモなどがみられます。ロマスと呼ばれるところには遺跡ももちろんあるわけです。ですから、ロマスと遺跡の保護は一体化して行うことが必要なのです。

その他に博物館で働く人と一緒に、チャンカイ文化(後11世紀~15世紀)を代表するピスキーヨ・チコ遺跡(図4-5)を訪問する活動も行いました。博物館で一緒に働いている方々は遺跡博物館のコレクションを長年守ってきてくれた人たちなのですが、遺跡を訪ねたことがほとんどありません。遺跡について知ってもらうような機会があればと思い、遺跡訪問を計画しました。



図 4-3 アンコンのロマスでの現状確認





図 4-4 ルクモのロマス (左:植物が繁茂する前、右:植物が繁茂)



図 4-5 ピスキーヨ・チコ遺跡

2013年から2018年まではリマ日本人学校でも 常勤講師として勤務していたので、学校教育の中 にアンデス文明研究で明らかになってきたことを 還元する機会をもつこともできました。アンコン 遺跡博物館とのつながりをつくるところまでには 至らなかったのですが、ここで紹介しておきたい と思います。図4-6、図4-7は、私がリマ日本人 学校で勤務していた時に行った総合的な学習の授 業です。この時は生徒さんと一緒にキープ(結縄) づくりを行いました。少しでもキープが身近に感 じることができれば、博物館に行った時に展示品 を楽しんでもらえるのではないかと考えて授業を 行いました。それまでは、校外学習でリマ市内の 博物館を訪問しても展示品を見過ごしたり、関心 をもてなかったりすることが多かったように思い ます。しかし、事前に何点かキープを実際作った あとであれば、博物館に行った時に「これ自分作っ



図 4-6 キープづくりの授業

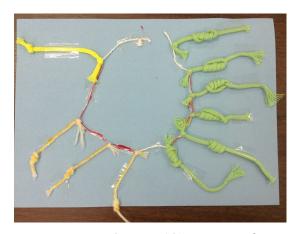


図 4-7 見本として制作したキープ

たことがある」と言える子供たちの反応があった ように思います。勿論、子どもたちと一緒に行っ たキープづくりが当時と寸分違わないか、正確か どうかについては課題もあるのですが、作ること によって自分たちが関心をもっていなかったもの が、少し身近にはなったように思います。

私個人がアンコン遺跡博物館で関わったプロジェクトの成果を社会還元するために様々な活動を行ってきたのですが、結局のところ遺跡の現状を改善していくことにつながっているとはまだまだいえません。遺跡の関係人口を増やすような取り組みが必要に感じております。そのため、ロマス保護に関わる政府及び市民の方々との活動、地域での学校教育活動などへ結びつけていくことが欠かせないように思います。

現在 SDGs がよくフォーカスされています。この SDGs と結びつけた考古資料の活用が大事になってくるのではないかと考えています。考古資料を活用するために、様々な立場の人たちとのネットワークをつくっていくことが大事です。ただし、ネットワークづくりは時間もかかり難しいのですが、私自身が少しでも主体的に動いていければと考えています。短い時間でしたけれども、以上となります。拙い話を聴いてくださり、ありがとうございました。

### 5. ペルーの台所:食文化からみる多様性と変化

## 佐々木 直美 (法政大学教授)

法政大学の佐々木直美と申します。よろしくお 願いします。本日私は「ペルーの台所:食文化か らみる多様性と変化」というタイトルでお話をさ せていただきますが、まずは自己紹介からさせて いただきます。私がペルー文化を研究するきっか けは何だったかということなのですが、ペルーへ の高校留学がきっかけでした。これは留学時の写 真です。当時最初にお世話になったお宅が後ろに 写っています。そして約一年の留学を経て私は 15kg 太りました。何故私がこんなに 15kg も太っ てしまったかというのは後ほど詳しくお話をさせ ていただきます。では、「どうしてペルーへ行っ たの?」とよく聞かれます。先ほど芝崎さんから もペルーをフィールドとする考古学の人達はどう やって研究者になったのかという問いがありまし たね。私がペルーに留学したのは本当に軽い気持 ちと言いますか、当時私は AFS; アメリカン・ フィールド・サービスという高校生の留学を斡旋 する機関から留学をしました。その時に留学の希 望先を書きます。確か5カ国ぐらい書く欄があっ たと思います。私は地球儀を見て日本から1番遠 い国に行こうと思いました。ぐるっと地球儀を回 して、南米に巡り会ったというわけです。

そしてもう1つはおそらく私がまだ幼稚園の頃だったかと思いますけれども、当時テレビ放送さ

れていた「アンデス少年ペペロの冒険」というア ニメがありまして、それを見ていて漠然と「幻の インカ帝国」というのが頭に残っていたのでしょ う。「じゃあ地球儀で日本の裏側にある国で、私 がなんとなく魅力を感じるのはどこかな?幻のイ ンカ帝国だ。」ということで第1希望先に「ペルー」 と書き、ペルーへ派遣されることになりました。 そして幻のインカ帝国への魅力を感じてペルーに 行ったわけですけれども、考古学ではなくてペ ルーの人々のことが大好きになりました。私を受 け入れてくれたホストファミリー、それから学校 の友達。実際に生活する中で触れたペルーの人々 がとっても明るくて親切でした。今から30年以 上前のペルーなんですけれども、当時はペルーの 政情がとても悪くて日本とペルーの郵便物も半年 以上届かない時期がありました。郵便局の人がス トライキをしている。それから国際電話もなかな かかけるのが難しくて。私が最初にお世話になっ たお宅には電話もなかったんです。電話をかける には電話電報局みたいな所に行ってそこで国際電 話をかけないといけない。しかも私はペルーで話 されているスペイン語を一言も知らずに行ったわ けですね。ですから、なかなか自分で国際電話を 掛けに行くというのが難しかった。ということで いろんな不自由がありました。そんなふうに人々

も政情不安で非常に苦しい時期だったにもかかわ らず、はるばる日本から来たよく訳の分からな い日本人の女の子を1年間無料でホストファミ リー、ホストスクールとして受け入れてくれる人 たちと出会いました。温かい人々に幸運にも恵ま れたということで、私は、ペルーの人々は何を大 事に生活して生きていて、どんなものを食べて、 どんなことに喜びや悲しみを感じて生きているの かということに強く興味を持って惹かれるように なりました。そこで私は考古学ではなく、ペルー の人たちのことをもっと知りたいと思うようにな り、専門的には人類学;現代のペルーの人々の文 化・社会を研究するという道を選ぶことになりま した。現在は、ペルーで大切にされている「祭り」 の中で披露されてきた「踊り」について研究して います。その他に、やはり私は食べることが大好 きだし、それからペルーで出会った食べ物がとっ ても美味しかったので、ペルーの食文化について も研究をしています。

自己紹介はここまでにして、ペルーの地理的な環境をざっくりとおさえていきたいと思います。ペルーは南米大陸にあり、西側は太平洋に面しています。そして背骨のようにアンデス山脈が走っていて、そして東側には密林地帯が広がっています。このざっくりと分けた3つの地理的な違いが生活環境にも強く影響をしてくる地域となります。太平洋側・海岸地域を、スペイン語でコスタ、アンデス山脈をシエラ、そして密林地帯をセルバというふうに呼び分けます。

では本題となります。研究者達が出会ったペルーの台所を紹介していきます。私が1人で見聞きしたものよりも今回のシンポジウムの趣旨の1つである、「広くいろんな人にペルーの魅力を知ってほしい」ということ、そしてペルー研究・アンデス研究それから広くは古代アメリカ研究にもっと関心を持っていただきたいということもあるので、ほかの研究者の活動も少しだけご紹介する意図もありまして、私だけではなく複数のペルーをフィールドとする研究者の方にお願いして資料とコメントを提供して頂きました。

まず、この写真は私が撮ったアヤクチョという

ところの写真です。1番左がアヤクチョの祭りの時で、みんなが楽しみにしていた豚の丸焼きが出来上がったのでこれから肉を切り分けるという嬉しい瞬間の写真です。真ん中は祭りの準備をする台所の様子、それから向かって右上は別の祭りになりますが、お祭りの準備をする女性たちの様子を同じように撮ったものです。

ここから少し詳しく見ていきます。まずはこ れ、私が1998年の7月にアンデス高地で撮った ものです。場所はこれもアヤクチョというところ です。地図を載せました。赤くなっているところ がアヤクチョ県で、ちょうどアンデス高地の部分 になります。私はこのアヤクチョの祭りを調査し に行ったのですが、その時にお世話になったお宅 の台所です。お家の中にかまどが設置されてお り、かまどのすく隣がお母さんの指定席でした。 この女性がお母さんなのですが、お母さんがかま どに火を入れて鍋をかけると子供達が集まってき てお母さんのお手伝いをよくするんです。2人の 男の子がいました。お手伝いをする2人の男の子 たちもその日学校であった出来事などをお母さん と話して、かまどに火がつくとその家族の会話が 始まっていくといったホッとする瞬間でした。ア ンデス高地の主食はジャガイモが多いと言われま すが、私が祭りの期間にお邪魔したということも あって、そして私のような訪問者が来たというこ ともあったのでしょう、毎日、お米を炊いてくだ さいました。もちろん、様々な種類のジャガイモ も振る舞ってくださいました。アンデスの祭りは 1週間近く続くのですが、10日ほどお邪魔をした 後に、いよいよこの村を去るという日の朝、この 家の小さな息子さんが、私たちにお弁当を作って くれました (図 5-1)。このお弁当作りに使った かまどは家の外に設置されていました。お弁当は トウモロコシを炒ったものです。これをスペイン 語では「カンチータス」と呼びます。これから出 発する私にこれをお弁当として持たせてくれまし た。この後私は世界一深い渓谷の1つと言われる コタワシ渓谷を徒歩で越えなければならなかった のですけれども、このお弁当のおかげで無事越え ることができました。左の写真がコタワシ渓谷を

越えるところです。一緒に調査をしていた友人を 後ろから私が撮りました。お昼ご飯の時の様子が 右側です(図 5-2)。ペットボトルに入れられて いるのは清涼飲料水ではなく、トウモロコシを発 酵させた発酵酒で「チチャ」と呼ばれるものです。 このチチャを飲みながらみんなでカンチータスと チーズをかじってお昼ご飯を取ったという思い出 です。

次の写真は、文化人類学で牧畜文化を専門とす る若林大我さんからお借りしたものです。若林さ んが撮られた写真ですけれども、向かって左側、 これがクスコ県カルカ郡で、右側がクスコ県カン チス郡で撮った写真です。クスコはどこかと言い ますと、ここも地図を載せました。アンデス高地、 ちょうどインカ帝国の都であったところです。私 の先ほどの写真のアヤクチョの家の中とよく似て いるのですが、左側は夕飯の支度を始めようとし ているお姉さんと妹たちの写真です。暖房設備の ない高地の住居ではかまどは温まると、暖を取る のにも役立ちます。本当に私もそのように感じま した。そして右側の写真、これは、私は実際に見 たことはないのでお借りして良かったなと思うの ですが、さすが牧畜文化をご専門とする若林さん ならではの写真です。かまどの燃料に利用する リャマやアルパカの糞を「ウチャ」と呼び、これ を貯蔵するための構築物を「ピルワ」と呼ぶそう ですね。この中にウチャを貯めておくということ で、雨水等で湿ると燃料として使えないので隙間 ができないようにこまめな修繕をするというコメ

ントをいただいております。非常に興味深い写真 だなと思って私も拝見しておりました。

次の写真もアンデス高地なんですけれど、ペ ルー考古学ご専門の芝田幸一郎さんからお借りし たものです。これはアンカシュ県ですね。地図で 見るとアンカシュは広い海岸部に面しているので すが、これはチャビン・デ・ワンタル村というと ころで、非常に有名な世界遺産にもなっている遺 跡がある高地の部分です。コメントとしては、数 千年の歴史を誇る料理パチャマンカの様子だとい うことです。パチャマンカというのはペルー料理 の中でも非常に特別なものです。なぜかと言うと 地面に掘った穴に焼き石を敷いて、そこに香辛料 や香草等で漬けた肉とか芋などを蒸し焼きにする 料理ということで、いわゆる「アースオーブン」 の料理です。これも今ではおもてなしとかお祭り の時に食べられることが多いです。時間をかけて ゆっくりと火を通していくので非常に柔らかくお 肉が仕上がってとても美味しいです。この時の様 子は世界遺産を発掘中のスタンフォード大学の調 査団を芝田さんが訪問した時に受けたおもてなし ということだそうです。このアースオーブンです がパチャマンカに似たもので同じ屋外の料理でワ ティアという料理もあります。それについてはま た後でちらっと出てきますのでご紹介したいと思 います。

続きまして、これは動物考古学がご専門の清家 大樹さんにお借りした写真です。これはカハマル カ県の様子です。カハマルカと言いますと、ペ



図 5-1 カンチータス作り 1



図 5-2 コタワシ渓谷でお弁当

ルーの北部にあります。地図が左下に出ています が、ペルー北部のアンデス高地となります。これ は、2011年に撮影して頂いたものですけれども、 村での資料調査中にずっとお世話になっていた村 の人たちが研究室の台所で鳥を1羽捌いて料理を 振る舞ってくれたということだそうです。清家さ んからのコメントによると、「ペルー料理が大好 きなので現地の方に料理方法を教えてもらい一緒 に料理を作ることができたことがとても嬉しく良 い思い出になりました」、ということで実際に作っ てくださった料理の写真も提供してくださいまし た。スープ類、スパゲッティのような麺類、そし てそれからご飯にメインを添えたような形の料理 がよくペルーで食べられるものです。そのような 写真を提供して頂きました。また遺跡から出土し た動物の骨を研究しているという清家さんですけ れども、「村人がどのように鳥を解体して調理し ているのか興味深く観察することができました」 というコメントもくださいました。日本ですと、 魚をさばいたりするっていうのはよくあるかと思 いますけれども、魚を1尾ずつ買ってきてさばく ということを見るのはあまり私のお世話になった お家ではなく、それより鳥や、後で出てきますが クイを家で丸々調理するというような機会が多 かったという風に感じています。

次もそのような感じの写真です。私は1度も 行ったことがない密林地帯(セルバ)の写真をお 借りしました。ご提供くださったのは大橋麻里子 さん、アマゾンをフィールドにして環境社会学を ご専門とされています。地図で示した、ウカヤリ 県というところの写真です。向かって左側は、ア グーチという齧歯類の動物だそうですけれども、 アマゾンの人たちは皆動物の肉が大好きだそうで す。網焼きか煮込みにして食べるのですが、作業 しやすいように調理台を設けているお家はちょっ と珍しいそうです。右側は、魚なのですが、これ に使用している薪は畑を作るために伐採した樹木 を使うということです。食事に欠かせない魚だそ うですが、どんな魚かというとピラニアやナマズ ということです。こういったピラニアやナマズは 小骨もなく脂がたっぷりで美味しいそうです。も

う1つウカヤリ県の写真をお借りしました。これ はいかにもアマゾンらしいお宅なんですけれども 住居(寝る場所)とは別に台所を作るそうです。 森から必要な建材を集めてきて自分たちではしご も含めて建設をするそうです。また、収穫してき たバナナは使う分だけ手の届きやすい場所に吊る した後、他は2階に保管しておくということで、 確かに2階の部分に保管しているバナナのような ものが見えるかと思います。川や井戸から汲んで きた水の入ったバケツは傾けた時に使いやすい高 さに設置するという工夫もなされているというこ とです。後は鍋つかみ代わりの古い洋服を吊るす タオルホルダーを付けたりと台所の形は決まり きったものではなく、使い勝手を考えながらどん どん変わっていきます。そして、写真に写ってい るのは、女性が毎日欠かせない、熟したバナナを 煮込んで作るバナナジュースをちょうど作り終え たところだということです。私はペルー料理が大 好きなんですけれども、私を15kg太らせた1番 の原因はこのバナナにあります。その話をこれか ら少しさせて頂きます。

これは私がお世話になっていたお宅の台所で す。海岸地域(コスタ)になります。今までと違っ て、やはり日本の家庭にだいぶ近い様子だと思い ます。最初に私が高校に留学した時の写真を紹介 しましたけれども、そこのお宅とは別で私は2件 のお家にお世話になったのですが、2軒目のお宅 の台所の様子です。場所はチクラヨという町です。 このチクラヨ、これも芝崎さんが話題にしてくだ さいましたけれどもシパンという遺跡が有名なと ころで、そのチクラヨの町のお宅です。通りに大 きな窓が開いていて常に明るい日差しが入ってき てとても開放的で広々とした台所でした。ここは 4人姉妹のお宅で、私も加えて5人の女の子、そ れに両親と住み込みのお手伝いさん(家事労働を してくださっていたこの写真の女性)の家族とい うことで、毎日この写真の女性は10人以上のお 昼ご飯を準備して下さいました。私が大好物だっ たのがペルーで「貧者風ご飯」に添えられるバナ ナフライです。貧者風ご飯というのは、ステーキ と目玉焼きと、そしてバナナフライ。カリブ・中

米の方でバナナフライと言うと、甘くない調理用 のバナナが使われるんですけれどもペルーのバナ ナフライは甘いです。海岸地域になると主食がお 米になります。お米は、私がお世話になったお宅 では必ずニンニクとちょっぴりのお塩とそれから 油を入れて炊くのでもうお米だけでも、薄い塩味 がついて美味しいです。だからおにぎりなんか大 好きな日本人にとっては、もうそのご飯だけで美 味しいんですけれども、それに甘いバナナフライ が加わるとあまじょっぱくてそれだけでご飯がた くさん食べられます。ホストファミリーのお父さ んに「直美、誕生日に何が食べたい?」と聞かれ て私はバナナフライをリクエストしてしまい、4 人のホストシスターたちを大変がっかりさせてし まいました。日本で言うと「お茶漬けが食べたい」 と言ったようなものですから、なんでよりによっ てそんなものというふうに言われましたね。4人 の姉妹たちが期待した答えというのは、例えば下 に写っている鳥の唐辛子クリーム煮、あるいはペ ルーを代表するセビーチェ(これは冷菜ですけれ ど、新鮮な白身魚や貝・タコ・エビなどを、ライ ムの効いた、塩・ハーブ・赤タマネギのソースで 締めたもの)。この写真が、ペルーの有名料理、 セビーチェです。6月28日はセビーチェの日と いう風に言われていますので、こういった美味し いものがあるのに、なんでよりによってバナナフ ライなのか言われました。研究者になってからも 調査のためにペルーへは何度もいきました。その 度にホストファミリーのところには顔を出すよう にしています。私が顔を出すたびに、ホストファ ミリーではバナナフライをたくさん作って待って いてくれるというのが定番になっています。この 貧者風ご飯はセビーチェに負けないくらいペルー を代表すると思います。ペルーにあるハンバー ガーにベンボスというところがあります。右手の 写真です。お店の形も変わっていますが、ペルー 風ハンバーガーということで貧者風ハンバーガー も売りにしています。中身はパテ(お肉)、目玉 焼き、バナナフライが入っているというのが特徴 です。

そしてもう1つ、海岸部の料理を紹介したいと

思います。これは私がカニエテと呼ばれるところで南米最古の仏教寺院、慈恩寺を訪れた時にちょうどお盆の集いが行われていましたので、その時に撮影させていただいた写真です。これは、スパゲッティのようなものを茹でてるのですが、それに加えて出来上がったものが、奥の左上からパパ・ア・ラ・ワンカイーナ。これはペルー料理です。ジャガイモにチーズのソースをかけたもの、そしてここの集いには沖縄出身の日系人の方々がたくさんいらっしゃったということで、沖縄風の料理がテーブルに並んでいました。奥の方からさつまいものお菓子と蒸しパン、そして手前の方が天ぷらです。

ペルーの食文化が持つ魅力は何だろうというこ とを改めて見ていくと、先ほど他の研究者が見た 台所ということでご紹介しましたけれども、同じ 国の中でも地理的条件によって台所の様子や設 え、そして食材が様々であることがお分かり頂け たかと思います。もう1つ多様な料理文化の組み 合わせがあるということも強調したいと思いま す。アンデス・アマゾンの先住民の食文化に加え て、スペインを中心とするアフリカ・中国そして 日本の食文化がペルーという1つの台所に集結し て、その結果、豊かでどの民族にも馴染みやすい ような料理を生み出してきたと言えます。そして 世界的にペルー料理が注目され始めた背景は何か と言うと、2007年以降に続々といろいろな動き が出てきます。ペルーガストロノミー協会が設立 され、それからリマ国際美食祭、MISTURA が 開催されるようになった、そしてペルーガストロ ノミーが注目されるに至った立役者ガストン・ア クーリオ氏に代表される「スター・シェフ」たち の活躍があります。2012年から2019年にかけて ワールド・トラベル・アワードの World Leading Culinary Destination 部門で8年連続ペルーが受 賞したり、観光資源として世界のメディアからペ ルーの美食が注目され始めています。たとえば、 2019年にペルーの国際空港を利用して入国した 旅行者の約10%が旅行の主な目的をペルー料理 として挙げていることからもそのことが分かると 思います。ガストン氏のレストランを訪れた芝田 さんの写真をお借りしました。それほど盛り付けにはこだわらないペルーの家庭料理と全く違って、非常に洗練された料理のプレゼンテーションを行っているというのが特徴です。そしてこのガストン氏が中心となったペルーの料理の動きが映画にもされました。「Cooking up Dreams」というタイトルの映画です。ちょうど今年ペルーの独立200年を記念して日本でもペルー映画祭が開催されています。そこでもこの映画が取り上げられています。

そしてもう1つ国を挙げて、ペルーの美食を観 光資源にしようという動きがあります。2013年 にはアメリカ・ニューヨーク州で初めてペルー料 理フェスティバルが開催されました。この時ペ ルー大使は「美食と音楽やダンスのような文化に よってペルーの国の価値を高めていく」と宣言し ました。この写真は、ニューヨークでの美食祭り の様子です。アンデスの伝統料理のワティアも紹 介されていました。ワティアを紹介したこの女性 にも私はご自宅でインタビューしました。この方 はペルーにお子さんを残して教育費のためにアメ リカに移住を決意したと語りました。ニューヨー クで家事労働を数件掛け持ちする中で機会があれ ば、職場で自慢のペルー料理を提供してきたとい うことです。彼女が作った料理が右の写真です。 ペルーの美食祭の中で注目を集めていたものの1 つがこのクイ、「テンジクネズミ」と訳されます。 それから長い行列を作っていたのはこのドーナツ です。これもペルー独特のドーナツでサツマイモ とカボチャのピューレを練り込んだものです。ピ カロネスと呼ばれるこのドーナツは、19世紀のリ マの人々を描いた絵にも描かれているものです。

ニューヨークで私が出会った別のペルー人女性 とそのキッチンをもう1つ紹介します。ニュー ヨークで長年アンデス文化の普及に努める女性 が、ニューヨーク州立大学のケチュア語サークル の人達と一緒に料理を作っている様子です。この 方は当日開催されたペルー料理付きの音楽ライブ でこの料理を提供しました。音楽ライブの様子が この写真です。アンデスの先住民の言語であるケ チュア語やアンデス音楽を紹介する活動を続ける この女性も、先ほどの女性と同じように、アメリ カに移住したペルー人女性が自分の台所からアメ リカ社会と繋がっていることを私に感じさせてく れました。彼女たちは、まるでペルーの料理大使 のような役割を担っているんじゃないかというよ うに思いました。

ここまでの話をまとめると、食に関するペルーの多様性は、先住民に加えて、様々な文化的背景を持つ多くの移民の人々が持ち寄った調理法と、豊かな食材に支えられているということです。さらに近年は盛り付け方の工夫や、ペルー独特の作物に高い栄養価をアピールするなどによって、まさに国を挙げて「美食の国・ペルー」というイメージを作り、宣伝して、それがずいぶん成功していると言えます。ペルーにはたくさんの美味しいもの・日本人の舌にも合うものがありますので、ぜひ本場のペルーの料理を試しに行くというだけでもいいので、是非ペルーに興味を持っていただけたらと思います。ご清聴ありがとうございました。

- 伊藤)はい、ありがとうございました。佐々木 先生に質問がありますので答えていただ けたらと思います。「ペルーでのチーズ の産地はどこでしょうか?」ということ ですね。
- 佐々木) 有名なのは、カハマルカと言われるペルー北部のアンデス高地になるかと思います。他の先生、何かご意見があればお聞かせください。
- 伊藤)ありがとうございます。

#### 6. 質問・ディスカッション

- 伊藤)そろそろディスカッションの方に行きたいと思います。ディスカッションについては伊藤ではなく、渡部が司会を務めますのでそろそろバトンタッチをしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。
- 渡部)お疲れ様でした。パネリストの方々、カ メラオンでお願いいたします。ありがと うございます。今回のシンポジウムは、 2019年に実行委員会を立ち上げた際、 高校生や中学生にも直接語りかけるとい うより2段階で考えましょうという話に なりました。今回主旨説明でお話ししま したように、教員など知識を扱う職業の 方、テレビを作る人、漫画を書く人など が、読んでくれたら・聞いてくれたらそ の後また知識が広がるんじゃないかと考 え、知識を扱う人々をターゲットにした 企画としました。そのような意味では、 今回講師として参加して下さった芝崎さ んのような方、本をたくさん読んでそれ を分かりやすく解説してくださるという 方の存在が我々にとっては非常に貴重で す。

その理論の取っ掛かりとして芝崎さんにきている質問です。これから出版されるアンデス関係の本ですね、それについて先週講師を務めて下さった多々良さんからのご質問です。「構想を始めてから10年も経たれているということで、どういう点に苦労して、なぜこれほど長期間かかったのでしょうか?」という質問があります。その間におそらく研究者が書いた本、またメソアメリカと同様に、網羅的に読まれているかと思うのですが、本を読まれてどういうところが難しかったとか面白かったとかいう感想もお聞きしてみたいと思います。

芝 崎) 本当にすごい数の文献があって、しかも

更新、更新という感じで新たな発見や見 解が出てくるので学びが必要で。それは とても楽しいのですが、さらにイース ター島の本も同時進行してしまいまし て。イースター島をやるとアンデスのこ とを全部忘れて、アンデスのことをやる とイースター島のことを全部忘れる始末 で。なので一番の原因は、こちらのキャ パシティ不足や記憶力に難があることも あって、その「学び」「再・学び」に膨 大な時間を費やさざるを得なかった、と いうことです。本で面白かったのは、自 分レベルの人間にもわかりやすく解説し てくれ人間ドラマも感じられるもので、 たとえば泉靖一さんの『インカ帝国』。 研究者としてもすごい方だと思います が、なんと言っても名文家であると思い ます。そのほか本当にいっぱい面白い文 献がありすぎて、全部挙げたいぐらいで す。周りの友だちとかはもちろん読んだ こともなく、すごくもったいないと思い ます。

渡 部) ありがとうございます。研究者はいつも 論文を書くのに焦点を当てていますの で、一般向けに書いてくださいって言わ れると難しいです。私などは下手なので、 泉先生の本がわかりやすいということで すので参考にさせていただきます。あり がとうございます。

今回は古代アメリカ学会のシンポジウムということですが、研究という意味ではどんなことに興味を持っていただいてもいいと思います。しかし、学会としてこの分野に興味を持って欲しいということを目標とするのであれば、他の分野と差別化する必要もあります。そういう意味で、考古学を他分野と比較した時の魅力ってなんだろうかっていうことを少し考えてみたいと思います。瀧上さんは2

番目に非常に専門的な話を分かりやすく 説明してくれたのですが、元々というか 今も理系ですし、色々な学問分野がある わけですが、その中で人類学を選ばれて、 アンデス考古学の研究をされていますけ どもどうでしょうか? 講演の途中で一 言「仲間と一緒に謎解きをやるのが魅力 である」という言葉がありましたけど、 他分野で、理系の他の分野と比較した時 の魅力について、瀧上さんどうでしょう。

- 離上)そうですね。他分野をどこに設定するかだと思うのですが、理工学分野などの新しいものを作るという方面に比べるとやっぱりロマンチストが多いのかなという気がしています。今そこにある数百年とか数千年前に実際にこの世にいた人たちの生きた痕跡を追い続ける人たち、そういうロマンを追い求める人たちがみんなで1つの謎を解いていくあたりがすごく魅力的で面白いのかなと私自身は感じているんですけれども。他の考古学の先生にそのあたりを伺わせて頂ければと思います。
- 渡 部)では松本さん、その魅力についてお願い します。
- 松本)25年くらい前のことを思い出しますと、 私はやはりビジュアルから入っていった 気がしています。ですので芝崎さんの話 を聞いていても共通するものを感じまし た。こんなに面白いものがあるのかとい うイメージが記憶に残っています。それ こそ展示会のカタログなどに引き付けら れましたね。もう1つの重要なきっか けは、1993年に放送された日本調査団 のクントゥルワシ遺跡の調査をめぐる NHK の番組ですね。こんなに国際的な 研究を日本人がやっていて大きな成果を 上げているんだということにまず驚きま した。そしてその番組の中で非常に丁寧 に考古学という学問がどういうものかが 示されていた。つまり、発見に至るまで

にどれほど地道な作業を重ねなければい けないか、研究のためにどれほどの人が 協力しなければいけないかが本当によく わかりました。だから2段階でのめり込 んだことになりますね。まずはビジュア ルでハマって、その後で意外なことから 定説をひっくり返すような発見が生まれ るっていう魅力に気づくわけです。これ が私にとって最初の体験といえると思い ます。いろんな種類の発見があってその プロセスを追いやすいというところ、追 体験しやすいというところ、それが考古 学の面白いところだと思います。それを 少し今回もできるだけ話に組み込もうと したんですけれども、難しかったですね。 そして、いろんな種類の発見をめぐって そこに現れる人とのつながり、研究者と のつながり、現地社会とのつながり、そ ういったものも魅力の一部かなと感じて います。

渡 部) ありがとうございます。考古学について の魅力を語る中で、アンデスについては 日本人が活躍していることが1つのポイントであったということですね。

質問が来ています。やはり「興味を持たないと知ろうとしない」のが当然なので、一般の人にアンデスなどに関心を持つフックが多くなればいいと思いますが、皆さんどうすればフックが増えると思いますか、という質問です。

引っかかるという意味で日本人が活躍しているということも1つのフックなのかなと思います。今回のシンポジウムもまさにどうやったら興味を引くことができるかということを考える場なので、答えがあるわけではなくて、我々がアイデアを出す必要があると思います。今回中南米、先週はメソアメリカ、今日はアンデスということですが、同じ考古学でもいろんな地域があるわけで、その全てを専門とする人はいなくて、その1つの地

域を選んでやるわけなんですが、このアンデス、中南米の魅力について、市木さんは長期間ペルーに滞在して、佐々木さんも高校の時からずっとペルーにいたということで、この地域としての魅力をどのように伝える事ができるのか、をお2人にお聞きたいと思います。市木さんお願いします。

市 木) 私は、リマ日本人学校で5年くらい仕事 をさせていただきました。例えば地理と いう科目で砂漠気候や乾燥帯について学 びます。ペルーの砂漠っていうのは教科 書に出てくるような砂漠気候や乾燥帯の ものではないのですが、校外学習や修学 旅行へ行くと子供たちは実体験を持って 教科書で学習した内容を話題にしてくれ ることがありました。地域が持っている 魅力を子供たちは座学だけで勉強するわ けではないのですね。ただ、日本の中に いるとやっぱり教え方とか変わってきた りするかなと思います。日本とペルーは 遠い場所ですが、例えば日本史で学習す る江戸時代の新井白石が書き残した書物 のなかに、インカの話が出てきます。そ ういった歴史を、日本史を教える場合に も絡めて教えることも可能になるのでは ないかと感じております。また、佐々木 先生のお話された料理を例にしても非常 に面白い材料がいっぱいある地域であ り、日本人にもなじみのある食材がある ので、ペルーの魅力や日本とのつながり を教育に還元できるのではないかと思っ ています。私自身ペルーでの沢山の人と の出会いによって様々なことを学びまし た。ペルーは日本とのつながりを考える 材料が沢山あり、それが魅力だと感じて います。

渡 部) はい、ありがとうございます。たまたま 地理を最初にされたことで、結果的に魅 力に取り憑かれたのだということだった と思います。じゃあ佐々木さん、先ほど 料理の話が中心でしたけども、バナナだけで 15kg は太らなかったと思いますけども、食べ物以外のことについてお願いします。

佐々木) やはり私はペルーの人々に魅力を感じま した。もともとは、漠然とインカ帝国に 魅力を感じて、考古学に憧れてペルーを 選んだわけですけれども、先ほども話し たようにやはり人々が非常に魅力的だっ たということですね。それとは別に、何 がペルーの地域としての特別な魅力があ るか、それは食べ物と音楽です。音楽の 話は今回できませんでしたけれどもペ ルーの音楽の多様性というのも非常に面 白いんです。ペルーの音楽と言うと「コ ンドルは飛んでいく」のケーナとフォル クローレのイメージが日本では一般化さ れていますけれども、実はアフロ・ペルー 音楽というのも大変魅力的ですし、フラ メンコに影響を与えたカホンもペルーの 文化財の一つです。食文化と音楽が私は 非常に魅力を感じるところで、この2つ の共通点は何かと言うと多様性なんです ね。この多様性を紐解いていくと歴史を 見ることになって、その歴史の中に日系 人の歴史、それからアフリカの人たちが 来た歴史、それからヨーロッパの人たち が来た歴史、あるいはもっともっと行く と考古学になって先住民の人たちの歴史 があってということでその歴史の深さに 繋がっていく。そこが魅力かなと思って います。

渡 部) 1人1人に魅力を語らせると止まらない と思うんですけども、それをどのように 伝えるかが課題です。佐々木さんは講演 の中で「アンデス少年ペペロ」について 言及されました。同時代だったと思いま すけど、「太陽の子エステバン」がテレ ビで放映されてそれがきっかけとなって アンデスに興味をもった人が結構いると 思うんですが、テレビの影響・漫画の影 響のことを考えると我々もそういうのを手段として考えることもあるのですが、テレビについて佐々木さんはご覧になってはいないですか? ペペロとかエステバンとか。

- 佐々木) 私は幼稚園の時にペペロを見て、それで アンデスのイメージに憧れたというの と、多分小学生の頃にエステバンを見て いました。
- 渡 部)やっぱりそういうのがきっかけになっているのですね。最近だとテレビ離れが進み、ではどういうのが1番効果的なのかを考える必要があるかと思います。芝崎さんに戻したいんですけど、先ほど多々良さんからの質問で、「1番苦労されたところは何ですか?」という質問ですね、それと「インカの本はいつ頃出版される予定でしょうか?」という質問も来てますね。それと合わせてですね、アンデスの魅力をどのように伝えようとしたのかということも合わせて伺いたいと思います。芝崎さんお願いします。
- 芝 崎) インカの本がいつ出版されるかなんです けど1月の終わりです。宜しくお願い致 します。苦労したところは先ほども申し ましたように、学ぶことがありすぎて どっぷり沼に浸かってしまい、永久に終 わらず、いつまでも出来ない、というプ レッシャーを常にものすごく感じていた ところです。
- 渡 部) はい、それで 10 年かかったとのことで。 それで、アンデス文化の魅力の伝え方と かに関して、前作のメソアメリカと比較 してもいいんですけども、何かあります でしょうか。
- 芝 崎) そうですね瀧上先生も解説してらっしゃいましたように、アンデスは(東西の)短い距離の中で環境が大きく変わって、まるで地球の全環境みたいなものが小分けされて収められてるじゃないですか。この地理的な特化性がメソアメリカとは

大きくちがうところですよね。その唯一 無二の環境ゆえに育くまれた多様な(それぞれの)文化の面白みを伝えられたら、 と思います。

また、先ほど「アンデスへの関心のフック」をちょっと考えたのですが、今ゲームとかでアステカに興味を持ち、そこからアステカとかの神が、同人誌などでキャラクターとして動かされ盛り上がったりしているようですし、アンデスもいいキャラクターの神がいっぱいいるじゃないですか。ナスカの土器に出てくる神とか。モチェの豊穣神とか。ゲームのキャラクターになれば、そこからもアンデス文化に興味を持つ人も増えるのでは、と素人考えですが思いました。ほんとゲームの力はすごく強いと思います。

渡部)ありがとうございます。以前はテレビ だったが今はゲームという方法もある じゃないかというご意見ありがとうござ います。それで1週間前のディスカッ ションでは、謎とか不思議というのは、 興味を持ってもらう入り口としていいん だという意見がありました。なんか自分 たちが違うという所を示すことはいいこ とですが、逆の語り方もあると思います。 人間としてこういうところが同じなんだ とか、そして先ほども出ましたが同じ日 本人はこういうことを研究してるんだと いうことで、自分に近づけて興味を持っ てもらえばいいんだということもあるか と思います。それで質問が来ているんで すけども、アンデスとかマヤの人たちは、 我々と同じモンゴロイドであるというよ うな説がある、という質問です。そうい うことなども踏まえて日本人との近さを 魅力や面白さとして伝えることができる んじゃないかと思うんですけども、専門 に近い松本さんと瀧上さんに類似性から みたアンデスの魅力や特徴についてお聞 きしたいと思います。松本さんからお願

いします。

- 松 本) 直接的な魅力ということではないのです が、魅力を伝えるための工夫という意味 では大学の講義で気を付けていることが あります。例えば1、2年生向けの講義 では、理系も混じって世界史などの科目 を受けてない学生も受講することがある んです。その場合共有できる情報が先に あると面白さが伝わりやすいということ があると思います。アンデスにおいては 農耕が確立する前に巨大な神殿が出現す るという現象があります。これはそれま での古代文明の考え方では説明ができな いんですね。この点を扱う時には、古代 文明の定説を徹底的に理解してもらって からじゃないとなかなか理解されないん ですけれども、その時に緩衝材として日 本の事例を取り入れるようにしていま す。日本の縄文時代ってアンデスの文明 形成期に近いところもあるんだと。農耕 が完全に確立していない状態で三内丸山 のような遺跡ってあるじゃないかという ような形で、比較的名前にフックがある ような日本の事例を合わせることを心が けています。これによって、少し理解が 易しくなる、面白さに気づくことができ るところがあるんじゃないかっていうの はここ何年か講義をしていて、実感とし て思っていることです。
- 瀧 上)やっぱり「日本と似たところがあるんだ」というところは興味を持ってもらうきっかけとして使うことは結構ありまして、例えばアンデス地域だとトウモロコシが主食のひとつでお酒に使ったりですとか、それをさらに儀礼の中で使う、神様に捧げたり自然に捧げたりするとか、それは日本の米も同じような使い方をしますよね。主食でもあり、神様に捧げる食物でもあり、もちろん自分たちでもたくさん飲むと、そういうような共通性があるんだよっていうところから入ると、

- やはり食文化に対して興味を持っていただけて、食性の話なんかもよく聞いていただけるということがあります。自分達と全く違う人たちではない、どこか同じような考えを持った世界の人達だったんだ、というところは良いとっかかりかなという風に思います。
- 渡 部)2人とも説明の枠組みとしては共通点が とっかかりとして有効に利用できるので はないかということでした。シンポジウ ムの1つのきっかけは来年度から始まる 歴史総合ですね。高校の授業でどのよう な古代アメリカ関係の授業を展開してい くかということを想定しましょうという ことでした。それで市木さんが教材につ いて少しお話をしています。教材の作り 方・利用の仕方なんですけども市木さん は途中でアンコンのウェブサイトの話を されていました。それも大学・高校など の授業で使うにはどうしたらいいのかと いうことですね。もしそういったものが 有効であるとならば、古代アメリカ学会 でもそのようなところに力を注いでいく べきだと思うんですけれども。
- 市 木) 古代アメリカの研究だけに限らずにウェ ブサイトの教材をダウンロードできるよ うな仕組みは作れるかなと思います。授 業をおこなう場合にはその目的について 考える必要があります。例えば授業をす るからには何らかの目的・目標があり、 それを達成するために教材が必要なんだ と思ってもらえるような教材が欠かせま せん。教材を選ぶ時には、生徒の実態を 考えて教材を選びます。ウェブサイトで 様々な生徒の実態を想定して教材を提供 し、使っていただくような形になれると 良いのではないかと感じています。主体 的に全部自分たちで調べて考えられる子 もいれば、やっぱりサポートがある程度 のところまではわかろうとする子どもた ちもいるだろうし、あるいは全くそう

じゃない場合もあるかもしれません。ダウンロードできる教材を工夫することが1つかなと考えています。

- 渡 部) ありがとうございます。それで「芝崎さんの本を学校図書館に入れます」というような意見が来ておりますけども、教材として、そういった本の一部を配ることは芝崎さんはどうでしょうか? もしやって欲しい、あるいはやめて欲しいというか、著作権の問題があるか、学校の授業であれば大丈夫なのか。ちょっとそこを教えていただけますか?
- 芝 崎) もう別に全然使ってくださって構わない と言うか、かえって宣伝になってくれる のでじゃんじゃん使ってくれと言いたい ところです。是非お願いします。
- 渡 部)本の一部をコピーして配布するのは大丈夫ということですね。ただネット上に流すといろいろ問題が起きるので我々もネット上に流す情報に関しては考えていきたいと思います。それで今回のシンポジウムも講演録という形で古代アメリカ学会のホームページに掲載することになると思うんですけども、それをどう高校生・中学生あるいは教員の方々などにも伝えるか、その方法をまた考えていきたいと思います。

では最後の質問になるかと思いますが、高校生・中学生などの若い世代に興味を持ってもらうということが1つの目標ですけれども、自分たちと同じような人が研究もやっているんだ、そういう究者は特別な変わった人がやっているのではなくて自分でも出来るんだということを伝えたい。そういう意味で例えばしたとを伝えたい。そういう意味で例えば日本だと考古学では研究者は大半が男・おじさんばっかりなんですけどもアメリカを衆国だと半分が女性で、ラテンアメリカで例えばアルゼンチンなんかだと9割女性なんですね。これから女性・男性と

いう枠組み自体が問い直されるかもしれませんけども、現在は女性も実は考古学はやりやすい分野であるというようなメッセージを伝えたいと思います。そして佐々木さんについては研究者になるつもりはなかったが結果的になってしまったということを伺っておりますので、そういうことから瀧上さんと佐々木さんに特に中学・高校の女子にメッセージがあれば頂きたいんですけど。

- 龍上)では、私(瀧上)の方から先にお話ししてよろしいでしょうか。そうですね。研究者に限らず、社会進出っていうのはまだちょっと大変な部分もあるかなと思うんですけれども、やっぱり海外の学会ですとお子さん連れとか家族連れでいらしてる方もいますし、皆さん普通のパパ・ママの顔をしながら発表の壇上に登るという方々も多くて、やっぱり普段の生活、普通の一般的な生活をしていてもその延長線上で研究もしているんだというようなことは、もっと我々も見せていけるような機会があればいいなと思いますね。
- 渡 部) ありがとうございます。では佐々木さん はいかがでしょう?
- 佐々木) 私も自己紹介で言ったように最初から研 究者を目指して勉強してきたわけではあ りません。自分の好きなことをやってた いらこの道に来たという感じです。とに かく若いうちはアンテナを広くはって、 まだいろんな可能性を活かして欲しいと 思います。アンデス考古学の道には進ま ないかもしれないけれども、ぜひいろん な本を読んでそれで自分の好きな事を伸 び伸びとやっていただけたらいいのでは ないかと思います。今研究者という立場 から言うと、結構女性が働きやすいと感 じます。私は子育て中で、もちろん大変 なところもあるけれども、でも他の職種 の同年代の友人と話しても、実感として も、大学で働くことは女性にとって働き

易いし、充実していると思います。ぜひ 興味がある人は研究者も目指してみてく ださい。以上です。ありがとうございま した。

- 渡 部) 力強いメッセージをありがとうございました。今回5人の講演者のうち4人は学会の学会員ですけれども非学会員として芝崎さんに登壇していただきました。今回の試みも含めて学会に対してのメッセージなどありましたら一言お願いしたいんですけどもよろしいでしょうか?
- 芝 崎)このようなフザケた感じの本を書いてる者にお声がけしていただいたことで、学会の度量の大きさを噛みしめさせていただいてます! アカデミックな学会が一般的に醸すイメージは「敷居が高く、位も高く、プライドも高く」といったもので、なのに、古代アメリカ学会はにわか者をはじめ、どんな人にも、フレンドリーに門戸を大きく開いてくださる、温かい会だと知りまして、感激しております。

また古代アメリカ文化を広めたい、 もっと一般的に、というお気持ち、情熱、 ご尽力がよくわかり、勝手にガンガン応 援したいという気持ちでおります。中南 米文化の面白さがもっと伝わるように私 もおこがましいですが微力ながらも頑張 ろうと思いました。

渡 部)ありがとうございます。我々も魅力を伝えるために芝崎さんの本を使わせていただきます。2日間に渡って開催いたしました古代アメリカ学会主催の第3回公開シンポジウムはこれで終了したいと思います。これから講演録の作成もいたしますので、もう少しお付き合いください。講演録ができましたら読んで頂きそして他の方に広めていただければと思います。講師の皆様、そして今日ご参加の皆様、長時間にわたりどうもありがとうございました。以上でこのシンポジウムは終わります。ありがとうございました

#### 7. シンポジウムの時間で取り上げることができなかった質問とそれに対する回答

- 質問1) 佐々木先生に質問です。以前、ペルーに 行った時に、ジャガイモに泥を塗って食 べている人々に会いました。このような 土食の文化はごく一部のものなのか、高 地全般なのか、ペルー全体で知られてい るものなのかご存知でしたら教えて下さ い。
- 佐々木)アンデスの土食については、ペルーとボリビアの主にチチカカ湖周辺で報告されています。ケチュア語で「chaco チャコ」と呼ばれる粘土を食する習慣は、先コロンブス期から行われていたようです。消化器系の不快を緩和したり、ある種のジャガイモの苦みを和らげたりするとして、多くは民間療法的に摂取されてきま

した。近年では、粘土による細胞保護効果や豊富なミネラルによる健康・美容効果、殺菌効果などをうたって商品化されているようですが、それらの効果と医療的活用については、今後より一層の科学的な検証が期待されています。

質問 2) "学んだこととの関連性を持たせる"という点で関連するかもしれないのですが、最近コロナ下で出張ができず、ドローンを活用してオンライン出張会議が行われています。ドローンを飛ばすことで、出張時には車でしか行けないような場所の撮影もでき、逆に状況がわかりやすい場合もあります。中南米への知識の普及という点で、ドローンの活用はどのよう

に行われているでしょうか。

- 松 本)ドローンはある種考古学調査の在り方を変えたということができると思います。 1つには遺跡のパノラマ的な写真を比較的容易に撮影することができるようになった点が重要です。これによって比較的大きな建築に関しても高精度な写真測量が容易となりました。遺構だけではなく、その周囲の地形を含めて3Dモデルを作成するなど、どんどん活用されていると思います。最近ではレーザー測量の機材をドローンに搭載することもできるようになり、さらに高精度なデータの蓄積が可能になっているようです。
- コメント1)世界史を選択する生徒たちは、「英雄の出てくるゲーム」で世界史に興味を持った、と言っています(昔は三国志で

- したが)。但し、そのゲームには、中南 米の話は出てこないので、協力隊に考古 学で参加していた昔の自分の話を導入や 中学生向けの学校説明会に活用していま す。芝崎みゆきさんの著作は、是非、学 校図書館に入れるよう、冬休み明けに動 きます。
- コメント 2) 体験授業で初めて「マヤ」に触れた 中学生たちは、「面白そうだから選んだ」 「マニアックだった」「高校の授業は違う な、と思った」と感想を寄せてくれまし た。少しはきっかけになったと思います。 また、教科書会社も「インディオ」とい う言葉は現在差別的に使われており、教 科書では多用せず、説明を必ず加えてほ しいと、お願いして実現できています。 研究者ももっとたくさん教科書会社に働 きかけていただきたいと思います。

and an armining a superior of the contract of

発 行 古代アメリカ学会 発行日 2022年3月31日 編 集 古代アメリカ学会

2020年度科研費研究成果公開促進費事業 実行委員会

古代アメリカ学会事務局 〒 214-8580 神奈川県川崎末名摩区東京

神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1 専修大学生田キャンパス 10 号館(10602)

井上幸孝研究室内 E-mail:info@americaantigua.org 郵便振替口座:00180-1-358812

ウェブサイト URL https://americaantigua.org/